

511

139

9 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10<sup>19</sup> 1 2 3 4 5

始





支那印度

佛教史要

全

大正  
15. 4. 17  
丙交

本派本願寺教學部公認

平安專修學院編纂



釋尊像



## 序

學校教育に適當なる教科書を缺くことは、教ふるもの教へらるゝものゝ共に不便とする所なるのみならず、教育の効果にも甚大なる影響を齎らすものなり。わが本派本願寺に於ては、宗門初期の教育にあたり、夙に教授要目を作り、教科書の完全なる編纂を企劃せらるゝところあり、屢々派内の蘊蓄ある學者、經驗に富める教育家を招きてこれが完成を期せらる。而かも未だ一定の好材無かりしが、わが平安專修學院は十數年來特にこの方面に苦心し、謄寫代用として再三稿を改め、以て教科書編纂に精進するところありき。

由來宗教々育は、各々事情を異にするところによりて、その方法も亦千態あるは寧ろ當然のことに屬す。これが宗門の學校に於て實施せらるゝ場合、その教科書の編纂は殊に重大なる意義を有す。乃ち一の聖典を須ひて

これが訓詁的解釋を施すを可とせんか、若くは達意的方案を以てするを良とせんか、是れ從來識者の間に反覆論議せられたるところなり。思ふに宗門初期の教育にありては、この兩者を適當に鹽梅し、學ぶ者をして興味と熱情とを以て自ら嚮はしむるの途を講ぜざるべからず。

茲に多年の經驗に基き、如上の趣旨に據り、一定の教科書編輯を思ひ立ち、本派本願寺の公認を受け、清水興教書院主の好意に依り、專修學院各學年に通じてこれを上梓することを得たり。予の歡びやこれに過ぎたるものなし。蓋しその宗門教育に裨益する所尠なからざるべきを信ずればなり。終りに、この教科書編纂が主として足利輔教、苗村助教の容易ならざる努力に俟ちたることを記して、深厚なる謝意を表す。

大正十五年二月

平安專修學院長 渡邊隆勝 識

### 例言

一、本書は印度支那佛教史の大要を授けんがため、佛教專修學院、佛教學院の餘乘教科書として、且又本派本願寺教師檢定の受験用にも充つべく編述せり。

一、本書は中等東洋史教科書に準據して編年體に記述し、各時代に於ける佛教の特色、高僧の略傳、各宗派の興亡等を簡單に述べ、教理の如きはこれを省略せり。されど國史の不明なる印度佛教史にありては、教理發達の次第によりて、その盛衰を記述せり。

一、本書に示せる年代は、望月信享氏の佛教大年表によりて、西曆年代を

括弧内に記入せり。

大正十五年三月

編者識す

印度支那 佛教史要目次

第一編 印度の佛教

第一章 釋尊出世以前の佛教……………一

第二章 釋迦牟尼世尊の生涯……………五

  第一節 大聖の成道……………五

  第二節 大聖の教化……………九

第三章 遺教の結果……………一六

  第一節 王舍城結集……………一六

  第二節 吠舍離結集……………一九

第四章 阿育王の佛教興隆……………三

  第一節 阿育王の歸佛……………三

  第二節 華氏城結集と傳道師派遣……………三四

**第五章 小乘佛教の分裂**……………二七

**第一節 教團分裂の端緒**……………二七

**第二節 小乘二十部の分派**……………二九

**第六章 迦膩色迦王の結集**……………三三

**第七章 大乘佛教の興起**……………三四

**第一節 馬鳴 菩薩**……………三四

**第二節 龍樹及び提婆菩薩**……………三六

**第三節 無着及び世親菩薩**……………四〇

**第八章 大乘佛教の二大教系**……………四四

**第九章 印度佛教の衰亡**……………四九

**第二編 支那の佛教**

**第一章 佛教東漸と翻經時代**……………五三

**第一節 後漢時代の傳譯**……………五三

**第二節 三國時代の譯經**……………五六

**第三節 西晋時代の譯經**……………五八

**第二章 支那佛教傳播時代**……………五九

**第一節 東晋時代の佛教**……………五九

**第一項 苻姚二秦時代の傳譯**……………六〇

**第二項 法顯入竺と江南の佛教**……………六三

**第二節 南北朝時代の佛教**……………七一

**第一項 南朝佛教の隆盛**……………七二

**第二項 北朝の興佛破佛**……………七七

**第三項 南北朝の諸宗派**……………八六

**第三章 支那佛教大成時代**……………八九

**第一節 隋朝佛教の教運**……………八九

**第二節 隋代の諸宗**……………一〇一

**第一項 三論宗の大成**……………一〇一



第二項 天台宗の開立……………一〇二

第三節 唐朝佛教の大勢……………一〇五

第四節 唐代の諸宗……………一〇八

第一項 淨土教の大成……………一〇八

第二項 禪宗の大成……………一一三

第三項 玄奘入竺と法相俱舍宗の傳來……………一二五

第四項 華嚴宗の開立……………一二〇

第五項 律宗の大成及び義淨の入竺……………一二三

第六項 秘密教の傳來……………一二七

第四章 支那佛教保守時代……………一三〇

第一節 五代佛教の厄難……………一三〇

第二節 宋代佛教の復活……………一三一

第一項 天台宗の復興……………一三四

第二項 禪宗の隆盛……………一三九

第五章 支那佛教漸衰時代……………一四三

第一節 元朝佛教と喇嘛教……………一四三

第二節 明朝佛教の教運……………一四八

第三節 清朝佛教の衰頹……………一五一

目次終

支印度 佛教史要

平安專修學院編纂

第一編 印度の佛教

第一章 釋尊出世以前の印度

印度の地勢



印度は亞細亞南部の最大半島にして、東はベンガル灣、西はアラビア海に面し、北はヒンズークシ及びヒマラヤ山系によりて亞細亞本土に接し、恒河はヒマラヤ山の南より發し、中央平原の大部を潤ほしてベンカル灣に入り、印度河は西藏の高原に發し南流してアラビヤ海に注ぐ、而して古來印度の地は、中央平原を基點として、中天竺、東天竺、西天竺、南天竺、北天竺の五天竺に分れしが、就中、中天竺は恒河の流域に於て、印度文明の發祥地をなせり。

印度の住民

印度の住民はアールヤ人種にして、今を去ること四千年の昔、中央亞細亞より南下して印度河の流域に來り、コーラリヤ人、ドライヴイド人等の印度土着住民を征服して、東方恒河の沿岸に蕃衍し、こゝに燦然たるアールヤ文明を現出したり。

吠陀時代

これ等アールヤ人即ち印度民族は、元來宗教を重んずる種族にして、靜かなる恒河の流を憧憬し、天然の恩寵に感謝を捧げて、素朴なる自然崇拜の信念を有したり、この時代を吠陀の讚歌時代といふ。

婆羅門教

蓋し印度に在りては佛教以外の宗教は、總て婆羅門教と稱せられしが、吠陀は實に波羅門教の根本聖典にして、リグ吠陀、ヤジュル吠陀、アダルヴ吠陀、サーマ吠陀の四部より成り、これを四吠陀と稱す。而してこれをその内容より分類すれば、神に對する讚誦と、神に犠牲を供する禮儀とを説けるものにして、何れも自然現象を神

ウパニシャ  
ツト哲學

として崇拜し、その祭祀の方法は僧侶の間に口授密傳せられて、意義頗る深遠なるものとせられたり。

これ等意義深遠なる吠陀を理論的に究明し、これを説明せんとして出でたるものは、ウパニシャツト哲學にして、これ實に印度哲學の根元なるものなり。而して釋尊出世の前後に在りては、ウパニシャツト哲學は大に發達し、聲論派、吠陀論派、因明論派、勝論派、數論派、瑜伽派の六大論派ありて、これを六派哲學といふ。その他佛教に所謂九十五種の外道と稱するものは、これ等ウパニシャツトの分派にして、各々高遠なる説を立て、これを唱道したれば、印度の思想界は甚しく混亂せり。

社會組織

翻つて印度の社會組織を見るに、アールヤ民族の中には自ら三階級ありて、彼等が特有の宗教を重んずる點より、神聖なる祭祀を司る僧侶はこれを婆羅門と名けて最上級に位し、社會の安寧秩序

釋尊の出生

を保つ王侯武士の階級を刹帝利と名け、農業牧畜に従事する一般人民を吠舍と名けて、共に婆羅門の支配を受け、更にアーリヤ民族に征服せられたる、コーラリヤ、ドライヴイド等の土着住民は、首陀羅と名けて社會の最下級に居らしめ、四姓の階級は極めて嚴重に區別せられたり。

然るに四姓の階級制度は永く社會の安寧を保つこと能はず、專横なる婆羅門の壓迫と下級民の反抗とは、常に四姓の間に行はれて、階級鬭争は漸く甚しきを加へたり。この間に出て、四姓平等の大義を宣説し、婆羅門の獨占したる宗教の革新を絶叫し、混亂せる印度の思想界を風靡したるものは、實に刹帝利より現はれたる大聖釋迦牟尼世尊なりとす。

## 第二章 釋迦牟尼世尊の生涯

### 第一節 大聖の成道

釋尊の出世年代

大聖釋迦牟尼世尊の出世年代は、異説多くして、今日より容易にこれを推定すること能はざれども、一般に信ぜらるゝところにては、西曆紀元前六世紀より五世紀の間にありたるものゝ如し。

釋尊の降誕

當時中印度恒河の流域には、釋迦族の建てたる迦毘羅衛、拘利の二國ありて、純潔なる王統は連綿たり、而も此の二國は、古くより姻戚の關係を結びて頗る親密なりしが、迦毘羅衛、淨飯王は亦拘利王の女摩耶を娶りて妃となしたり、かくて釋尊は淨飯王を慈父とし、摩耶夫人を聖母として、藍毘尼の聖園に降誕し給へるは、實に花咲き香ふ陽春四月八日なりき。古來この日を灌佛會と稱し、又近年は花祭と稱して大聖の降誕を祝福するなり。

## 聖母の殂死

釋尊の幼名は悉達多といふ、これを釋迦牟尼といふは釋迦族中の聖者を意味する尊稱なり、悉達多太子生れて七日、不幸にして聖母はこの世を去りたれば、伯母なる波闍波提夫人の手に太子は養育せられしが幼にして聰明、廣く學藝を修めて不可思議の天才を發揮せり、長ずるに及びて人生の歸趣を靜思し、世を厭ひて出家の志ありしかば、父王は深く憂慮し、歌舞音曲、美味珍食、あらゆる五欲の樂みを盡して太子の心を慰めんとしたり。

## 太子の出城

然るに太子は五欲の樂みを以て、敢て満足すること能はず、偶々寶車に乗じ苑林に出遊せんとして、途に老病死者の悲痛を目撃し、更に沙門の平靜なる相を見るに及びて益々出塵求道の念禁ずること能はず、而も太子の妃耶輸陀羅夫人との間には、王子羅睺羅の生誕もありたれば、今は出家の時機到れるものと覺知し、一夜密に白馬乾陟に跨り、侍者車匿を伴ひて、迦毘羅の城門を遁れ出て給へ

## 太子の出家

り、時に二十九歳なりと傳へらる。

城門を出てたる太子は、東に向ふこと十餘里、羅摩林に至り、自ら落飾して沙門となり、父王に謝せんが爲、遺品を車匿に託して宮廷に還らしめ、獨り林中に入りて、苦行者なる跋迦婆仙に就きて解脱の道を求めたれども、意に満たざりしかば、直ちに仙人の許を去りて南方摩揭陀國に向ひ給へり。

## 父王の驚き

車匿は宮廷に還りて太子の出家を報ずるや、父王は大に驚き、直ちに使を遣して太子を搜索せしめしに、摩揭陀國王舎城の近くに漸く太子に邂逅することを得たれば、使臣等は百方父王の悲歎を告げて歸城を懇請せり、されど、太子は頑として應ぜざりしかば、やむを得ず阿若憍陳如以下五人の王族を出家せしめて、太子に奉侍せしめたり。

## 頻婆娑羅王の勸説

かくて太子は五比丘を従へて恒河を渡り、王舎城に至るや、かね

勤苦六年の  
苦行

林中の苦行  
を廢す

て太子の聰明とその尊貴とを傳へ聞きたる頻婆娑羅王は、歡待の限りを盡して、五天竺の大帝王たらんことを勸説したれども、太子は固より應ずる色なかりしかば、王は太子他日成道せば、必ず我を度せられよと堅く約して別れたり。

それより太子は阿羅邏迦蘭、鬱陀羅摩子等の仙人を訪ひて教を求めたれども、何等得るところなかりしかば、遂に意を決して無師獨覺するに若かずと、尼連禪河の東なる前正覺山の苦行林に入りて勤苦六年の行を勵みたり。

然るに林中の苦行は必ずしも成道の法にあらざることを覺知し、山を出て、身を尼連禪河の水に淨め、少女難陀婆羅の獻じたる乳糜の供養を受けて心身を恢復し給へり。これを見たる五比丘は、太子の志氣遂に屈したれば、共に道を求むるに足らずとなし、太子を捨て、西方鹿野苑に去りたり。

釋尊の成道



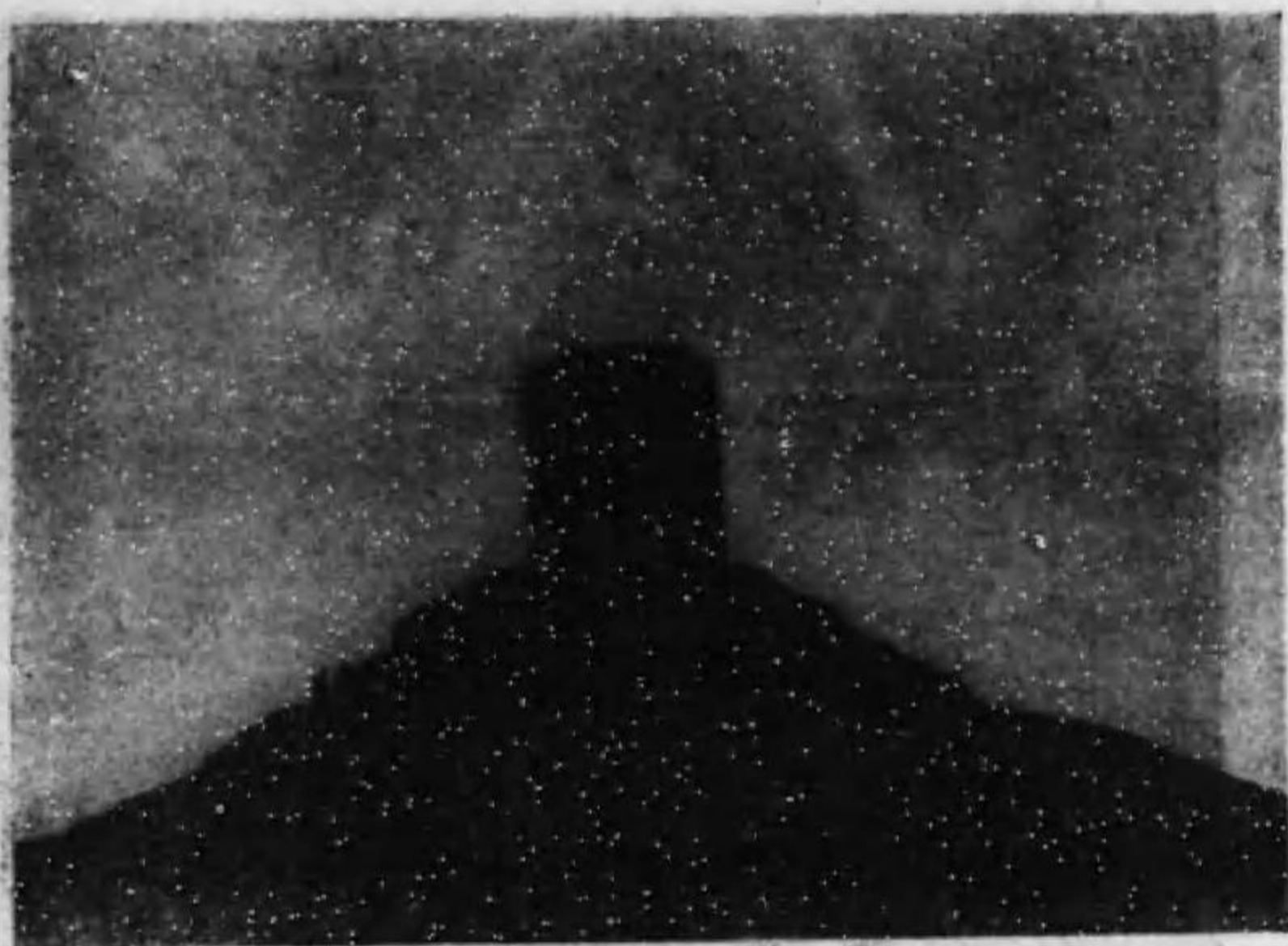
座寶剛金下樹地百

是に於て太子は獨り尼連禪河を渡りて佛陀伽耶に至り、菩提樹下に端座して誓つて曰く、我れ若し成道せざればこの座を起たずと、然るに有形無形幾多の惡魔は來りて迫害誘惑至らざるなかりしが、終に太子金剛の寶座を動かすこと能はず、斯くて二月八日の曉天、明星方に現するの時、廓然として大悟し、無上道を成じ給へり。時に三十五歳なりきといふ。古よりこの期節を成道會と稱して記念し來れり。

## 第二節 大聖の教化

初轉法輪

菩提樹下に大覺成道せし佛陀は、三七日思惟の後、阿羅邏鬱陀羅の二仙を度せんと、金剛寶座を起ちしが、彼等は既に死して世に在



鹿野苑迎佛塔

らざりしかば、道を轉じて波羅奈斯國の鹿野苑に至り、橋陳如等の五比丘を度し、彼等のために四聖諦の法を説きて、法眼淨を得しめ給へり、これを佛行化の初轉法輪となす。

佛は鹿野苑を去りて王舍城に向ふ、これ佛入山の前に於ける頻婆娑羅王の懇約を果さんが爲めなり、然るに未だ王舍城に達せざるに、會々雨期に入りしかば、途中に在りて佛は安居を結び、富樓那、摩訶迦梅延等を度し給へり、蓋し印度に在りては五月より八月に至る三ヶ月間は、降

夏安居

三迦葉の歸佛

雨多く草木繁茂し小虫繁殖の時なれば、この間は僧衆は外出せず、一處に止住して教法の講習を開き、又過去に於ける非行を懺悔して後來を誠むるを常とせり、これを雨安居又は夏安居と稱す。



鹿野苑初轉法輪塔

弟は、尼連禪河の畔に在りて、名聲最も高かりしかば、佛陀は先づ彼等を度せんと欲して優樓頻羅迦葉を訪へり。然るに彼は、佛陀の年少なるを見て容易に屈せざりしが、遂に誘化せら

れて、事火祭式の具を盡く河中に投じ、五百の弟子と共に佛門に歸したり。これを聞きたる那提迦葉、伽耶迦葉の二人は、又その徒弟五百人を率ゐて佛弟子となりしかば、佛は彼等の爲に杖林に留り

王舍城の行化



靈鷲山ノ前山

て法を説き給へり、これを杖林説法といふ。

佛陀はこれより三迦葉を始め一千有餘の弟子に圍繞せられて王舍城に入りしが、頻婆娑羅王は諸臣を將ゐて佛を城外に迎へ、竹林精舎を建て、佛を請じたり、これを伽藍あるの始めとなす。斯くて佛陀はこゝに安居を結びて説法ありしが、この間弟子となりたる者少からず、就中大迦葉は、王舍城外の富豪なりしが、佛陀の威容を拜して弟子となり又舍利弗、目犍連の二人の婆羅門僧

佛陀の歸郷

は、佛弟子の威容端正なるを見て大に感じ、竹林精舎に來りて佛を拜し、その教を聞くや、忽ち師徒三百と共に佛弟子となりたり。

その後佛陀は王舍城外なる靈鷲山に在りて教化ありしが、父王の請によりて故郷迦毘羅衛城に還り、先づ父王の爲に法を説き、次で宗族數百人を度したり。その主なる者は、阿菟樓陀、阿難陀、羅睺羅、提婆達多、阿那律、優婆離等なりしが、この中剃除髮師たりし優婆離の出家に就きては、諸弟子の中に快とせざるもの多く、彼を輕蔑し嘲哂するもありき、これ優婆離は首陀羅なりしを以てなり。然れども佛陀の眼中には四性の別なく、平等に化益し給ひしかば、佛陀の教團には、婆羅門あり刹帝利あり吠舍あり首陀羅ありて、印度古來の四姓の階級制度は完全に打破せられたるなり。

佛陀再び王舍城に行化するや、偶々拘薩羅國舍衛城の長者須達多(給孤獨)といふ者あり、深く佛の教に歸し、城外に祇園精舎を建立

舍衛城の行化



教團の隆盛  
とその迫害

提婆の逆惡

して佛を請ぜしかば、これより佛は多くこゝに止住して化を施し給へり。この時舍衛城の波斯匿王は殊に歸佛の念厚く、屢々祇園精舎に詣でて佛の說法を聞き、頻婆娑羅王と共に佛の二大外護者となり、又舍衛城は王舍城と共に佛の二大中心をなしたり。

かくて佛の行化は、摩揭陀拘薩羅國を始めとして、憍賞彌、吠舍離等の國々に及び、高足の大弟子等は亦諸國に遊化して佛の宣布に努めたれば、佛の威徳は普ねく五天竺に及び。然るに釋尊教團の隆盛となるや、これを嫉みて迫害せんとするもの少からず、婆羅門外道の徒は、或は婦女子を利用して佛徳を傷けんとし、或は毒飯を供養して佛を害せんとするが如き奸計屢々ありしが、殊に教團内に於ける提婆達多の陰謀はその最も大なるものなり。提婆達多は佛の從弟にして、勇猛多智人を籠絡する奇才あり



提婆達多像

しが、その徳望は迦葉舍利弗に及ばず、されど自ら佛陀に代りて教團の首たらんと、逆心を起し、頻婆娑羅王の太子、阿闍世を誘ひて父王を殺さしめ、太子を己れの外護者として佛を除かんとせり、これ觀無量壽經興起の因縁にして、提婆の陰謀は遂に破れ、志を果すこと能はずして悶死せりといふ。

佛陀の化道四十五年にして吠舍離城外に雨安居を過し、時は佛は自ら入滅の久しからざるを知り、北方拘尸那揭羅城に向ひしが、途上、跋提河の邊、娑羅雙樹の林に進みしとき、病愈々重りしかば、阿難をして娑羅雙樹の間に臥床を設けしめ、入涅槃の地と定め給へり。この時須跋陀羅と云へる老婆羅門あり、來りて教を請へるにこれを最後の佛弟として解脱の道を授け、また阿難に對して汝等滅後に於て師なしと憂ふる勿れ、當に波羅提木叉を尊奉すべし、是則汝等が大師なり。

最後の佛弟子

最後の教誡

と告げ、更に圍繞せる諸弟子を顧みて

汝等比丘よ諸法は無常なり、當に一心に出要を求むべし

佛陀の入滅

と最後の教誡を賜ひて、頭北面西右脇に臥し、永く涅槃の妙境に入り給へり。時に西曆紀元前四八六年二月十五日の夜半にして壽正に八十歳なりき。古來この日を涅槃會と稱し佛の涅槃像を奉安して追仰するなり。

佛陀の入滅し給ふや、遺弟等は悲哀禁ずる能はざりしが、上首大迦葉の來着を待ちて茶毘に附し、佛舍利は摩揭陀、拘薩羅等、佛有縁の八國の王に分ちたるに、何れも佛塔を建て、これを奉安したり。

### 第三章 遺教の結集

#### 第一節 王舍城結集

結集の動機

雙樹林下に佛陀の入滅し給ひし時、佛陀の高弟大迦葉は、多數の僧衆を隨へて傳道の旅に在りしが、偶々途に一波羅門の天華を捧げて拘尸那より來るに遭ひ、始めて佛陀の入滅を聞きたり。この時大衆は驚愕して、悲嘆慟哭止まざりしかば、大迦葉は平素佛陀が説き給へる、諸行無常會者常離の教を複演して彼等を慰諭せしに、獨り跋難陀比丘は衆に告げて曰く、佛の世に在るや、戒律嚴にして言行の拘束ありしが、佛既に世を去りぬ、今より各自意の欲するところに任ずべしと、大迦葉はこの言を聞きて深く憂慮し、遺教結集の要を痛感せり。

結集の必要

大迦葉は、佛陀の葬儀を營みたる後、大衆に告げて曰く、教主世尊入滅の後は、教誡し給ふ師なければ、正法に背きて異端邪説を信じ公然非行をなして憚らざるに至らんには、佛教遂に破滅の虞なしとせず、佛陀の直弟生存の間に於て速に遺教を結集し、これを後世

阿闍世王の外護

に傳ふるに如かずと、結集の急務を説けるに大衆は皆これに賛同したり。

この時王舎城の阿闍世王は、嘗ては提婆達多に欺かれて逆害のことありしも、今は深く佛陀に歸してその外護に力を盡せしかば、大迦葉の請によりて、王舎城外七葉窟に地を相し、宏壯なる講堂を建て、衆僧を請じたり。

三藏の結集

こゝに於て、大迦葉は學德兼備の阿羅漢五百人を選びて七葉窟内の會衆となし、自らその上首となりて三藏を結集せり、三藏とは經藏・律藏・論藏にして、經は多聞第一と稱せられたる阿難の誦出せしところにして四阿含經等これなり。律は持律第一の稱ありし優婆離これを八十回に誦出したれば、これを八十誦律といふ。而して論は迦葉自ら誦出せしところなれども今はその詳細を知ること能はず。かくて上首はこれ等三藏の誦出を會衆に諮り、異議

窟外結集

なき時は異口同音に合誦してこれを結集せしが、この間前後七ヶ月を費したりといふ。最初の結集なればこれを第一結集といひ、又會誦の場所に因みて王舎城結集ともいひ、或は會衆の數によりて五百集法ともいふ。

然るにその當時、彼の七葉窟内に入ること能はざりし大衆は、別に窟外に集り、阿羅漢・漢婆師迦を上首とし、經・律・論・雜集・梵咒の五藏を結集せり、窟内の結集に對してこれを窟外結集といふ。

### 第一一節 吠舍離結集

王舎城結集の後、教界には格別の異諍なく、一味和合して法海靜穩なりしが、凡そ一百年の後、吠舍離國內には律の上に異議を生じ一大紛争起れり。

當時吠舍離國東部地方の僧侶は、佛戒を持すること頗る寛にし

佛滅一百年間の教法

吠舍離結集の發端

て種々の異説を唱ふるものもありしが、偶々西部地方の耆徳、耶舍比丘は、吠舍離國を巡遊して大林の重閣講堂に留りしに、吠舍離の僧がその布薩會に當りて、參詣の俗士に金品の施與を受けたるを見て大に驚き、彼等に告げて「非法にして施を求むるもの、非法の求に應じて施すもの、能所ともに罪あり」といひ、且つ彼等の非法十事を列舉して、衆人の前に於てこれを詰責せしかば、吠舍離の僧衆は大に激昂し、耶舍の言行は比丘を誹毀するものとなして、遂に彼を國外に放逐せり。

當時中印度に在りては、東部地方には自由思想を有する佛徒多く、西部地方には保守思想のもの多かりしかば、耶舍は西部教徒の援助を得んと欲し、先づ西に走りて憍賞彌に至り、或は自ら各地を巡歴し、或は諸弟子をして書を齎して諸徳を歴訪せしめ、事實の始末を訴へたるに、その奔走の勞空しからずして、憍賞彌、摩頭羅、阿槃

自由保守の  
對峙

提等の西部諸國の僧侶は、多く耶舍の所見に左袒したり。

こゝに於て、吠舍離の僧侶も亦同志を東部地方に送りて遊説し、助力を求めしかば、東部の諸僧は多く吠舍離僧に應援を與へたり。斯くて保守と自由との二派は東西に對峙し、一般の教界も亦その何れかに加りて諍論あるに至れり。

時に吠舍離附近を領したる迦羅阿育王は、この状態を見て深く憂へ、東西二派の人々を集めて論點を聞き、重閣講堂に七百の僧衆を請じ、會誦を開きてその解決を試みんとしたり、かくて東西各々四人の代表者を舉げ、離婆多はその上首となりて吠舍離僧の行ひたる十條の正否を檢校し、會誦七ヶ月にして、この十條は佛制に背くものなりと確定したり。

斯の如く吠舍離に於ける會誦は、律藏を檢校して十事の正邪を定めたるものなれば、嚴密なる意義に於ての結集にはあらざれど

非法十事の  
會誦

も、古來これを吠舍離結集、又は第二結集、或は七百集法と稱す。

## 第四章 阿育王の佛教興隆

### 第一節 阿育王の歸佛

佛滅後二百年(西紀前三世紀)の頃、中印度摩揭陀國の華氏城に在りて、威名五天を震駭せしものは阿育王なり。

阿育王は、孔雀王朝の建設者、梅那羅笈多の孫にして、父頻頭沙羅王は、彼の性暴虐なるを惡み、遠く北印度の大守に謫したり。然るに父王の訃を聞くや、直ちに華氏城に歸り、兄の修摩那を殺して王位を嗣ぎたり。

斯くて阿育王は五印度を統一せんと欲して、南印度カリンガ國を征したりしが、當時カリンガ國は地の利に據りて優勢なる兵備

阿育王の性格

カリンガ征服

歸佛の因縁

を有し、容易に抜くこと能はず、阿育王は惡戰苦闘の後漸くこれに勝つことを得たれども、將卒の死傷十萬の多きに達し、頗る悲惨なるものありしかば、遂に王をして宗教的反省をなさしめたり。

阿育王が、佛教に歸依したる因縁に就きては、異説あれども、一説によれば、王が長兄修摩那を殺すや、その妃孕むあり、竊に華氏城を遁れ城外の村落に至りて一子を産む、名けて尼拘律といふ。尼拘律は幼にして出家せしが、一日その母を見んと欲して、首府宮城の下を過ぐ、偶々王は、樓上に在りて城外を歩行する一少年僧の態度整齊なるを望見し、侍臣に命じて宮中に招かしめ厚くこれを尊敬したり、尼拘律は年少なれどもよく作法に通じたるが、年長僧侶の同席なかりしかば、上座に著きて王の難問に答へ、不放逸は涅槃に達するの道にして、放逸は死滅に達するの道なり、不放逸の人は死することなく、放逸なれば生ける時も既に死せるが如しと道破せ

り、これを聞きたる王は、遂に誘化せられて佛敎に歸したりといふ。

### 第二節 華氏城結集と傳道師派遣

佛蹟巡拜

佛敎に歸依したる阿育王は、當時學德一世に秀で、名望四方に高き優波笈多を華氏城に聘し、常に法を聞きて樂みたりしが、優波笈多の指導によりて佛蹟の巡禮を志し、先佛陀降誕の地なる藍毘尼を始めとして、鹿野苑、拘尸那揭羅等多くの靈場を巡拜し、八萬四千の寺塔を建立して佛敎の外護とその興隆とに努めたれば、佛敎は大に隆盛に赴けり。華氏城鷄園寺の如きは、僧侶六萬人ありきと傳へらるゝによりても、その盛況は想



阿育王塔獅子頭

見し得べし。

佛敎の隆盛  
と異解者の  
輩出

佛敎の隆盛なるに反して、婆羅門敎は全く衰運に向ひ、婆羅門僧の轉じて佛敎僧侶となるもの漸く多く、殊に供養の利を失ひたる彼等は生活上の便宜を得むとし、外形佛者にして内心外道なる徒輩の増加するに隨ひて種々の邪曲行はれ、遂に紫朱辨じ難くして敎團の一致を缺ぎ、甚しきは邪曲の徒にして却つて清僧を殺害せんとするもありしかば、誠實なる僧侶は危難を避けて僻遠の地に隱栖するに至れり、殊に鷄園寺の如きは異解者多くして正衣を着せず、布薩その他の儀式に和合すること能はずして、説戒を行はざること七年の久しきに及びたりといふ。

華氏城結集

當時德望高き目健連子帝須は、華氏城を去りて摩頭羅城に退き、靜に正法を傳持せしが、阿育王は佛敎敎團の秩序頽廢し、和合僧の破れたるを痛く慨歎し、特に使を遣して帝須を招き、改革の事に當

傳道師派遣

らしめたり。ここに於て帝須は命を奉じ、華氏城鷄園寺に入りて學徳ある僧侶一千人を選び、自ら上首となりて會誦し、九ヶ月を費して佛教の統一を圖りたり。これを華氏城結集、又は第三結集、或は一千集法といふ。

かくて阿育王は、内に教權の統一を得たれば、これより廣く佛教の感化を邊地に布かんと欲して、南は錫崙より東は緬甸、北は迦濕彌羅より遠く中央亞細亞に至るまで、多くの傳道師を派遣して、大法を宣布せしめたれば、佛教は始めて世界的にその教線を擴張したり。

佛教の地理的區分

殊に摩晒陀の錫崙(師子國)に傳道したる佛教は、これ南方佛教の起原にして、錫崙より緬甸、暹羅に傳はれるものを南方佛教と稱す、又北方の迦濕彌羅地方に傳へられたるものは北方佛教にして、尼波羅より西域支那を経て我が國に傳はりたれば、後世地理的に佛

孔雀王朝の滅亡

教の區分をなせり。

「阿育王は佛教の興隆に努めしが、その晩年は宮城の一隅に隱棲して靜かに修道生活を送り、西曆紀元前二百二十七年に歿したり。王の歿後僅かに四十年にして、さしもに隆盛を極めたる孔雀王朝も滅亡し、印度の地は再び四分五裂したれども、王の佛教に對する功勳は、今猶歴然として、史上に永くその名を留むるなり。」

## 第五章 小乘佛教の分裂

### 第一節 教團分裂の端緒

佛教教團の分裂は、王舍城結集の際既に窟外結集あり、又吠舍離結集の際には十事の非法を肯定したる一派あるより見れば、分裂の端緒はこの間に胚胎せるものゝ如し、而してこれが直接原因を

分裂の發端



大天五事の  
新説

なしたるは、大天が唱へたる五事の新説なりとす。  
大天は佛滅二百年の頃に出で、識見高邁、聰明多智なりしが、從來  
傳承の教義に満足すること能はず、華氏城鷄園寺に在りて大衆に  
告げて曰く「餘所誘、無知、猶豫、他令入、道因聲故起、是名眞佛教」と、これ  
を大天の五事の新説となす。

新説の意義

一、餘所誘とは、阿羅漢は煩惱を斷盡せる聖者なれば精神的には  
煩惱の漏失なけれども、なほ肉體を有する以上は、肉體的不淨の漏  
失は免れず、故に惡魔は阿羅漢の衣に不淨を附け、恰も阿羅漢がこ  
れを漏失せしが如く装ひて阿羅漢を傷けんとすることあり。

二、無知とは、阿羅漢には生死流轉の因となるべき染汚無知の煩  
惱なけれども、無意識的不染汚無知を有す、されど未だ一切智を得  
ざるが故に自己悟得の程度を知らず。

三、猶豫とは、阿羅漢には煩惱より來る疑はなけれども、理性の判

斷より來る疑ありて、哲理上の問題には不明のこと無きにあらず。

四、他令入とは阿羅漢は解脫の境に達しながら、自らこれを知ら  
ず、他より教へられて初めて自己の悟得を知ることあり。

五、道因聲故起とは、心に佛の教を思ひ、聲にこれを發表するによ  
りて、聖道に達することを得べし。

上述の五事は、これ佛教修道上の現實生活にして、否定すべきに  
あらず、寧ろ斯る阿羅漢の生活こそ「眞佛教」と名くべきものなりと  
主張せり。

斯の如く大天は五事の新説を唱へしかば、保守派なる上座部は  
これに反對し、自由派なる大衆部はこれに讃同して一大論諍をな  
せり、これを教團分裂の端緒となす。

上座大衆二  
部の分裂

### 第一一節 小乘二十部の分派

戒律に對する自由派と嚴肅派との對立は、大天五事の新說に誘引せられて、大衆上座の二部に分裂せしが、更に思想の轉回と教理の複雑なるとに隨ひて、これ等根本二部には又多くの分裂を見るに至れり。

大衆部の分裂

大衆部に在りては、思想の自由なりし爲、忽ち分裂して、一説部、説出世部、鷄胤部となり、次で多聞部、説假部を出し、更に制多山部、西山住部、北山住部の三部を出して、約一百年の間に本末合して九部の分派を見たり。

上座部の分裂

上座部に在りては、保守的なりし爲、久しく異義の紛出なく安定を保ちたりしが、佛滅三百年の頃に至りて、説一切有部を出し、これより凡そ一百年の間に於て、説一切有部は、犢子部、化地部、飲光部、經量部の四部となり、更に犢子部は法上部、賢胄部、正量部、密林山部となり、化地部の下には法藏部を出して、本末十一部の分派を見たり。

斯く上座大衆の二部は各々分派して本末二十部の多きに達したれども、後世にその教理の傳りたるは説一切有部のみ、他の諸派は傳らずしてその説を知ること能はず。

### 第六章 迦膩色迦王の結集

貴霜王朝

佛滅後五百年の頃に、今の支那甘肅地方に住したる月氏族は、北匈奴の難を避けて伊犁地方に入り、更に葱嶺を越えて中央亞細亞に轉じ、大夏國を亡ぼして大月氏國を建てたり、これを貴霜王朝と稱す。これより大月氏の勢力は次第に擴大して、西は波斯より南は印度の國境に達したり。

迦膩色迦王は貴霜王朝第三代の王として大月氏國に君臨し、更に北印度より中印度摩揭陀國に侵入して領土を擴張し、健駄羅國の布路沙布羅城に都してこれを統一したり。王は拜火教徒なり

迦膩色迦王の印度侵入に歸佛

しが、印度に入るに及び始めて佛教の信奉者となり、盛んに寺塔を建て、廣大なる領土に佛教を布き、自ら佛教の外護者を以て任じたり。

## 結集の動機

斯て王は歸佛の後、政務の餘暇を以て經論を閲讀し、日々一人の大徳を招きて説法を聞きしが、その説くところ同じからざるを怪みて、脇尊者にその理由を問へり、尊者は答ふるに佛教の部派分裂して教義の異同ある旨を以てせしかば、王は甚だこれを遺憾とし、脇尊者と謀りて結集の業を起さんことを發願せり。

## 迦濕彌羅結集

ここに於て王は全國に令して佛教學者五百人を召集し、第一結集の靈蹟に於てこれを行はんとしたれども、脇尊者は異議を唱へて曰く、摩揭陀國は異解者多くして結集に適せず、寧ろ迦濕彌羅の靈地に於てこれを行ふに如かずと、王はその言に従ひて環林寺に五百の聖賢を請じ、法救、妙音、世友、覺天の四人これが上首となりて

十萬頌の優婆提舍を作りて經藏を釋し、次に十萬頌の毘奈耶毘婆娑を作りて律藏を釋し、最後に十萬頌の阿毘達磨毘婆娑を作りて論藏を註釋し、以て三藏を結集したり。

## 三藏の保護

結集の功成りたる後、王は編纂の成文を赤銅板に刻せしめ、石函中に納めて嚴封し、佛塔を建て、これを保存せり。而して修學せんと欲する者は、佛塔に入りて閲讀せしめ、猥りに外部に出すことなからしめたり。この事業は前後十二年を費し、その間王の軍隊はこれを警衛してその完結を全からしめたりといふ、これ第四結集にして、又これを迦濕彌羅結集ともいふ。

## 結集の特色

迦濕彌羅結集に於て注目すべきは、從來の結集とは趣を異にしたる編纂事業にして、口誦によりて傳承せられたる佛説は、始めて筆寫せられたることなりとす。然れども經律二藏の註釋は散佚して後世に傳らず、論藏の註釋のみは『阿毘達磨大毘婆娑論』として

大毘婆沙論

現存せり、而してこの『阿毘達磨大毘婆娑論』は迦多衍尼子の『發智論』を廣く解説し、諸部の異見を批判し會通し以て小乘有部宗の教義を大成せるものなり。

### 第七章 大乘佛教の興起

#### 第一節 馬鳴菩薩

佛滅後六百年間の佛教は、専ら小乘佛教隆盛にして、大乘佛教の見るべきものなかりしが、馬鳴菩薩出るに及びて、始めて大乘佛教の興起を見たり。

馬鳴菩薩は中印度の摩揭陀國に出でたる婆羅門の學者にして、辯才に長け議論に精通し、常に佛僧と論議して未だ曾て説破せられたることなく、名聲嘖々たりしかば、當時佛教の中心地たる摩揭

大乘佛教の興起

馬鳴の名聲

馬鳴の歸佛

馬鳴健陀羅國に至る

陀國は一時危機に瀕し、よくこれに對抗するものなかりきといふ。適々迦濕彌羅の比丘、脇尊者は、北印度に在りて傳道せしが、中印度の佛教が馬鳴に論破せられて窮するを聞き、老體をも顧みず奮つて中印度にいたり、馬鳴に會して、兩者何れか敗を取るに至らば、直ちに一方の弟子となるべきを約して論戦し、遂に、馬鳴は論破せられて脇尊者の弟子となれり。かくて馬鳴は脇尊者に就きて深遠なる佛教の哲理を學び、先に犯したる誹謗の罪を悔いて専ら佛教の宣傳に努め、又詩歌を作りて佛徳を讚嘆せしかば、その名聲は五天竺に轟きたり。

傳説によれば、その當時迦賦色迦王は摩揭陀國を征服し、償金の一部に代へしむるに馬鳴を以てし、これを得て凱旋せりといふ。馬鳴は迦賦色迦王に迎へられて、北方健駄羅國に至り、王の佛教外護と相待ちて大法の興隆に努めたり。

馬鳴の著書

大乘起信論の教理

馬鳴の著書として『大莊嚴論經』『佛所行讚』『大乘起信論』等あり『大莊嚴論經』は教誡的の隨筆にして、『佛所行讚』は佛陀一代の傳記を長篇の詩として記述したるもの、共に印度の佛教文學史上に一時期を劃せる名文なり。而して大乘佛教の深義を發揮せるは『大乘起信論』にして、森羅萬象は皆眞如の理より、無明を縁として現出せること、喩へば風に緣りて水上に千浪萬波を生ずるが如しと、眞如緣起の法門を説きて、大乘佛教興起の端緒を開きたり、又馬鳴は淨土教をも始めて唱へたれば、彼は實に印度に於ける大乘佛教の鼻祖として、又淨土門の先達として仰がるゝなり。

第一一節 龍樹及び提婆菩薩

龍樹の發心

馬鳴菩薩に次で大乘佛教を興隆せしものは、龍樹及び提婆の二菩薩なり。龍樹は馬鳴に後るゝこと二百年、即ち佛滅七百年(西曆二世紀)

の頃、南天竺、達羅毘荼國の婆羅門の家に生れ、幼にして聰明なりしが、偶々朋友三人と共に隱身の術を學びて、宮中に忍び入りしに、發見せられ、龍樹は獨り危難を免れしが、他の二人の斬殺せらるゝを見て深く世の無常を悟り、遂に發心出家したり。

大乘教宣揚

龍樹は初め小乗教を學習して深く三藏の奧義を究めしが、偶々雪山に入りて一老比丘に會し、大乘教を授かりてより、専心大乘の經論を研究し、熱心なる大乘教の宣揚者となれり。斯て龍樹は南天竺橋薩羅國の首府に留りて、盛に所得の法門を宣説せしが、國主引正王は厚く龍樹を崇敬し、領内の黑峯山に廣大なる精舎を建立して、龍樹及び諸弟子を屈請し、常に衣食を給して缺くるところなからしめたり。龍樹は久しくここに留りて、外道小乗の徒を破斥し、幾多の論釋を作りて大乘教の深義を發揮せしかば、その名は五天竺に轟き、第二の釋迦を以て呼ばれたり。

引正王の外護

龍樹の著書

諸法實相論

龍樹は千部の論師と稱せられて著書頗る多く、現存するものの中、殊に有名なるは『中論』十二門論『大智度論』十住毗婆娑論等なり、『中論』十二門論は主として諸法皆空の旨を説きて外道小乗の邪説偏見を破し、消極的方面より諸法實相論を主張せり。『大智度論』は般若經を論釋せる大著にして、『十住毗婆娑論』と共に、積極消極の二方面より有と空とを併せ説きて、諸法實相論を説述し、『十住毗婆娑論』の中の易行品には、彌陀他力の法門をも説き、その廣大なる思想は大乗佛教の全般に及び、後世八宗の祖師として仰がるゝなり。

提婆菩薩

龍樹の弟子にしてよく師法を繼ぎ、その教義を祖述したるものは提婆菩薩なり。提婆は師子國の人にして令名あり、人これを尊んで聖天といひ、又獨眼なりしかば迦那提婆とも稱したり。龍樹の聲望を聞きて憍薩羅國に來り、これと論議せんとして謁を求めしに、龍樹の溫容に接するや、忽ち化せられてその弟子となれり。

提婆の  
外道  
論破

龍樹、老齡に及びて講學布教に堪へず、提婆をして印度各地を巡遊せしめ、専ら外道の論破と大乗佛教の宣揚とに當らしめしが、當時中天竺摩揭陀國の佛教は萎靡して振はず、且つ佛徒は外道の徒に論破せられて以來、外道の壓迫を蒙ること甚しく、外道の徒は勝利の記念として佛寺の梵鐘を鳴らさしめざること十二年の久しきに及びしかば、これを聞きたる提婆は默する能はず、師に請ひて自ら外道を論破せんとす、然るに龍樹は提婆の少壯にして、老熟の外道に對論するの危険を慮り、試みに七日間に互る對論の實力を驗したる後、提婆をして中印度に赴かしめたり。提婆は直ちに摩揭陀國に進み、華氏城に於て國王親臨の下に外道と對論し、悉くこれを論破し、更に留りて摩揭陀國に大乗教を宣布せしかば、爲に中天竺の佛教は漸く復活することを得たり。

提婆の殉教

提婆は外道と對陣して至るところに彼等を論破し、遊化の迹頗

提婆の著書

る見るべきものありしが、一外道の弟子あり、その師が提婆の爲に屈服せしめられたるを恨み、遂に提婆を途に要して山林中に暗殺せり。提婆は號泣する弟子を顧みて、一切諸法空にして受者なく害者なしと教誡を與へたる後、平然として寂せりといふ。提婆は實に破邪的理論家なると共に、大布教育家にして、その遊化は、殆んど印度の大半に及びて大乘教の弘通に努めしなり、その著書百論は最も有名にして、龍樹の『中論』十二門論と共に三論と稱せられ、後世三論宗の所依となれり。

第三節 無着及び世親菩薩

無着世親の出世

無着世親の二菩薩は、佛滅後九百年(西紀)の頃、印度文化の最も燦然たりし、笈多王朝超日王の盛時に、北印度健駄羅國、布路沙布羅城の婆羅門の家に生れ、兄弟三人ありてその長を無着といひ、次を世

無着の修學

親といひ、末を師子覺と名けたり。

無着菩薩は始め婆羅門の聖典を學びて得るところなく、佛典を繙くに及びて頗る妙味を覺え、小乗化地部に於て出家せり。これより阿羅漢賓頭盧に就きて小乗空觀を學びしが、猶安んずること能はず、大乘經典を修むるに至りて大に得るところあり。斷然小乗を棄て、大乘に歸し、熱心なる大乘教の宣傳者となれり。

大乘教宣布

瑜伽師地論の由來

初め無着は北印度に在りしが、後、中印度の阿踰闍國に留りて大乘教の宣布に努めたり。傳ふるところによれば、彌勒菩薩、兜率天より阿踰闍の講堂に降りて無着の爲に法を説き、無着はこれを傳へて『瑜伽師地論』等を編述せりといふ。その後無着は橋賞彌に大乘を弘め、晩年は那爛陀に至りてその教義を説きしが七十餘歳にして寂したり。

無着の著述

無着の著書の重なるものの中『瑜伽師地論』は賴耶緣起論を説け

緣起論

る根本聖典にして『攝大乘論』『十地經論』は眞如緣起論を説き、共に唯心論を主張せり。而して無着の學説は世親に至りて擴充せられその完成を見たり。

世親菩薩の修學

世親菩薩は無着より若きこと二十歳なりしが、初め小乗有部に出家して教義を研究したれども、甚しく煩鎖なるを厭ひて經量部の所説を喜びたり。嘗て世親は名を匿して有部の中心地たる迦濕彌羅に赴き、留ること四年にして専ら有部の奥義を究め、屢々經量部の思想を以て有部の學説を論破せしが、有部の學者に悟入尊者あり、その世親なることを看破し、竊かに世親をして迦濕彌羅を去らしめその危難を免れしめたり。

俱舍論

健駄羅の本國に歸りたる世親は、經量部の思想を以て有部の教義を改造せんとして、弟子の爲に『阿毗達磨毗婆娑論』を講じて『俱舍論』を著し、これを迦濕彌羅に送りしに、有部の學徒はこれを見て喜

大乘教歸入

ばず、殊に悟入の弟子衆賢は『阿毗達磨順正理論』を著して世親に對決を求む、然るに衆賢は不幸その機會を得ずして寂せり。

かくて世親は新進の小乗學者として北印度に英氣を養ひ、盛に大乘教を誹謗せり、時に無着は阿踰闍國に在りて深く弟の淺慮を歎き、病と稱し世親を招きて曰く、我れ汝の小乗を信じて大乘を謗るを聞き心に病を懷けりと、世親は兄の優情に感じ、且つ大乘の玄旨を聞くに及びて、立どころに大乘に歸し、謗法の罪を慚謝せんが爲舌を斷たんとせしかば、無着はこれを誠めて、假令千舌を割くとも、その罪を滅すること能はず、先に誹謗せし舌を以て、大乘を説かば罪滅するのみならず更に功德の大なるものあるべしといへるに、世親は大に恥ぢてこれより専ら大乘教の弘通に努めたり。

超日王の尊崇

超日王は深く世親を尊崇し、參拾萬金を布施して、有部、大乘、比丘尼の三大寺を阿踰闍國に建立せしめ、王妃及び太子新日も亦深く



世親の著書

世親に歸依せしかば、世親の聲名は益々揚れり。その後世親は奢羯羅より憍賞彌に至りて大乘教の宣布に餘念なかりしが、八十歳を以て阿踰闍に入寂せり、世親は千部の論師と呼ばれ、多事なりし生涯に於て多くの著述をなしたり、その重なるもの、中『唯識論』は賴耶緣起を詳説して唯識宗の端をなし、『十地經論』は眞如緣起論を説きて地論宗を起し、『淨土論』は西方願生の信念を發表して淨土教を開き、又『俱舍論』は俱舍宗所依の論として佛教研究の基礎をなせり。

### 第八章 大乘佛教の二大教系

中觀瑜伽の二教系

馬鳴菩薩以來、龍樹、提婆、無着、世親等の諸菩薩出て、大乘佛教は大に興隆せしが、龍樹提婆の學説を繼ぎて實相論を説く空宗と、無着世親の學説を承けて緣起論を説く有宗とは、自ら二大教系をな

中觀教系の諸論師

し、前者を中觀教系といひ、後者を瑜伽教系と稱して、後世最も盛にその發達を見たり。

龍樹の中觀教系は南印度に興り、次第に中印度に及びて隆盛を極めたり、その教系には提婆の次に羅睺羅あり、青目あり、その後西曆第六世紀の頃には堅慧あり、那爛陀寺に住して盛んに實相論の弘通に努めたり、青目の弟子には清辨、及び須耶利蘇摩あり、清辨は『大乘掌珍論』を著して龍樹の法門を闡明せしが、殊に當時瑜伽宗の重鎮たる護法と對抗して、中觀宗の眞髓を發揮し、大に令名を馳せたり。

瑜伽教系の諸論師論

世親の瑜伽教系は、初め北印度に興り、漸次中印度に及びて隆盛を極めたり、世親の後には、親勝、火辨、德慧、安慧、淨月、護法、難陀、勝友、勝子、智月等の所謂唯識の十大論師を始めとして、幾多の碩學輩出し、各々世親の緣起論を祖述してその發揮に努めしが、殊に護法は學

戒賢智光の論評

德衆に秀でて『成唯識論』を著して頼耶緣起論の普及を圖り、又外道小乘の徒を説破すること頗る巧なりしかは、聲譽最も高く、第二の世親を以て尊崇せられたり。



那爛陀の遺跡

斯の如く中觀瑜伽の二大教系は、相對立して教理の宣揚に努めしが、瑜伽教系には護法の弟子に戒賢あり、中觀教系には清辨の法統を繼ぎたる智光あり、共に那爛陀寺大學に在りて、有空の教理を論評せり。古來これを戒賢智光の論評といふ。

那爛陀の由來

那爛陀は王舍城の北に在りて、佛陀は屢々この地に遊化し、又舍利弗の生地として古來佛教の因縁淺からざりしが、佛入滅の後こ

論師



那爛陀大學の遺跡

の地方の國王帝日は、この地に一寺院を建て、次で覺護、如來護、力日、金剛等の諸王は寺院を増築し、或は寺領を與へ、或は學寮を建つるあり、西曆第六世紀の頃には、印度の北半を統一したる戒日王の外護によりて那爛陀寺は頗る盛觀を呈し、學僧は數千に達し、集る者皆英才にして嚴正潔白なる生活を営みしかば、佛教研究の中心、學者の叢淵をなすに至れり。那爛陀寺教學の隆盛期に當りて、東印度に生れたる戒賢は、當時那爛陀寺大學の學匠として、聲名高き護法の徳風を慕ひて弟子となり、瑜伽、唯識、因明等の學を修めてその蘊奥を究めしが、會々南印度の一外道は、護法の高名を嫉み、自ら來りて護

戒賢の判教

法に對論を求めしかば、戒賢は師に代りて外道と對論し直に屈服せしめたり。それより護法は戒賢を信ずること益々深く、護法が那爛陀の學匠を退くや、戒賢は代りて學僧教養の任に當り、數十年一日の如く育英の業に従ひたり、西曆六百三十三年、玄奘が遠く支那より來りてその門に投ずるや、戒賢は百六歳の高齡を以て瑜伽唯識の玄旨を傳へたりといふ。

戒賢は素より緣起論の宣說者なりしが、彼の功勳として有名なるは、一代佛教を分類して、有空中の三時教判を立て、小乗教を有教に、龍樹の教系を空教に、世親の教系を中道教に配當し、龍樹の教系に屬する空教は發達の中間に在るものとしてこれを貶し、世親の教系たる中道教こそ最も發達の終極に達したるものなれとして自家の教系の位置を高めたるに在り。

智光の判教

然るに龍樹の實相論の教系を繼承したる智光は、心境俱有教、心

有境空教、心境俱空教の三時教判を立て、小乗教を心境俱有教に、世親の教系を心有境空教に、龍樹の教系を心境俱空教に配當して、反對派なる瑜伽教系は未だ至らざるものと貶し、自家の中觀教系こそ佛教々理發展の至極なれと判定せり。

斯の如く中觀瑜伽の二教系は、那爛陀寺を中心として相對峙し各々教理の研鑽に努めしかば、印度に於ける大乘佛教は、大に隆盛に赴き、那爛陀寺の大學は名實共に備り、その權威は五天を壓倒するに至れり。

第九章 印度佛教の衰亡

戒日王の後は、さしも隆盛を極めたる那爛陀寺教學も、いつしかその聲譽を失ひ、西曆七八世紀の頃を最後として、印度佛教漸衰の悲運に入れり。

印度佛教の衰運

## 衰亡の内的原因

衰亡の原因は固より複雑にして簡單ならざれども、その内的原因としては、佛教々理の煩瑣と教家生活の頽廢とに注意せざるべからず、彼の小乗教の如きは、分裂に分裂を重ねて益々煩瑣となり徒に末端の學說を争ひて解脱の大事を忘れ、これを革正せんとして興りたる大乘佛教も、いつしか同一運命の下に思辨に走り、議論に捕はれ現實の實際生活と隔離し、殆んど佛教の眞精神を失ふに至れり、且つ國王の外護に狃れて、教家の生活は無氣力となり、遂に墮落するに至れり。

## 衰亡の外的原因

さらにこれを外的原因に求むれば、異教徒の復活はその大なるものにして、西曆第七世紀の頃、クマールラは聲論派の經典に註釋を作り、大にその學派の爲めに奮闘して異教徒折伏の氣勢を強からしめ、頻りに佛教に肉迫せり、クマールラの後を承けて、一層婆羅門の學を宣揚し、民衆生活を支配して佛教に一大打撃を加へたる

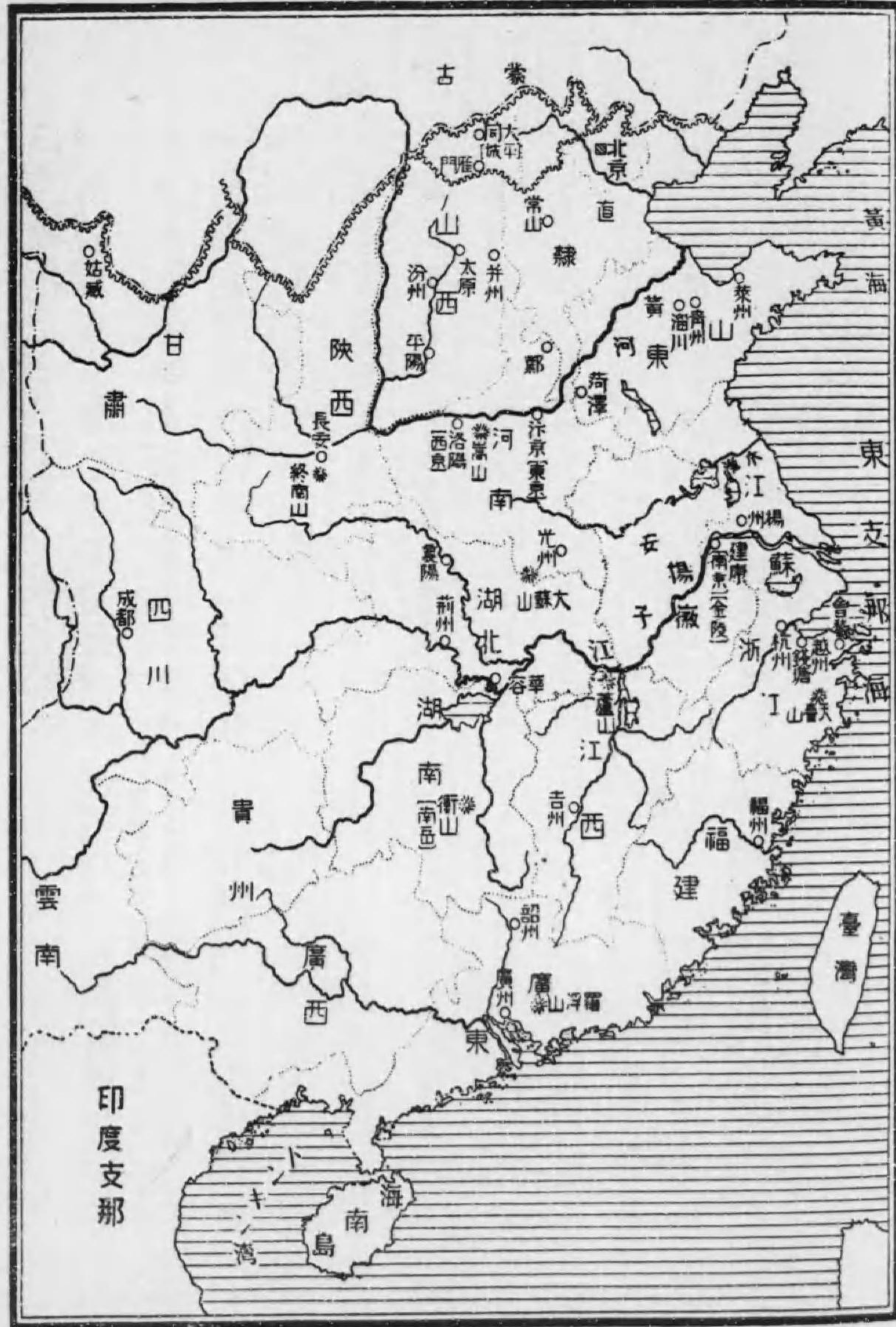
は、シヤンカラ一なり、彼は西曆第八世紀に出で、吠陀論學派の經典に注釋を施し、巧みに印度固有の思想を鼓吹し、自ら四方に遊化して盛に民衆の教化に努め、又その弟子をして隊伍を組織してその學派を宣傳せしめしかば、その感化は全印度に及べり。

その後第十二世紀の頃には、回教徒の侵入ありて印度在來の宗教思想を破壊し、猛烈なる開教を試みしかば、これ等内外の原因によりて、西曆第十二三世紀以後、印度の佛教は滅亡するに至れり。

## 印度佛教の概観

上來述べたる印度佛教の興亡盛衰を概観するに、佛陀四十五年間の説法は、迦葉、阿難等の佛弟子によりて結集せられ、阿育王、迦膩色迦王等の外護によりて、専ら小乗佛教隆盛の時代となりて、漸次組織的に發達せしが、時代の推移と思想の發達とにより、煩瑣なる小乗佛教に満足する能はずして、馬鳴菩薩は大乘佛教を振興し、遂に龍樹、提婆、無着、世親等の諸菩薩によりて、大乘佛教は盛に宣説せ

られ、中觀瑜伽の二教系は、那蘭陀寺を中心としてその發展をなしたり。然るに那蘭陀寺教學も、亦内外の支障によりて漸衰の止むなきに至れり、かくて一千有餘年に亘る印度佛教も、僅かに北方尼波羅地方に大乘佛教の跡を遺し、南方錫崙に小乘佛教の餘喘を留むるのみにして、その他の印度本土には全く衰亡せり。されど佛教の東漸によりて、支那にその發達を見るに至れり。



支那佛教史蹟圖

## 第二編 支那の佛教

### 第一章 佛教の東漸及び翻經時代…後漢・三國・西晉

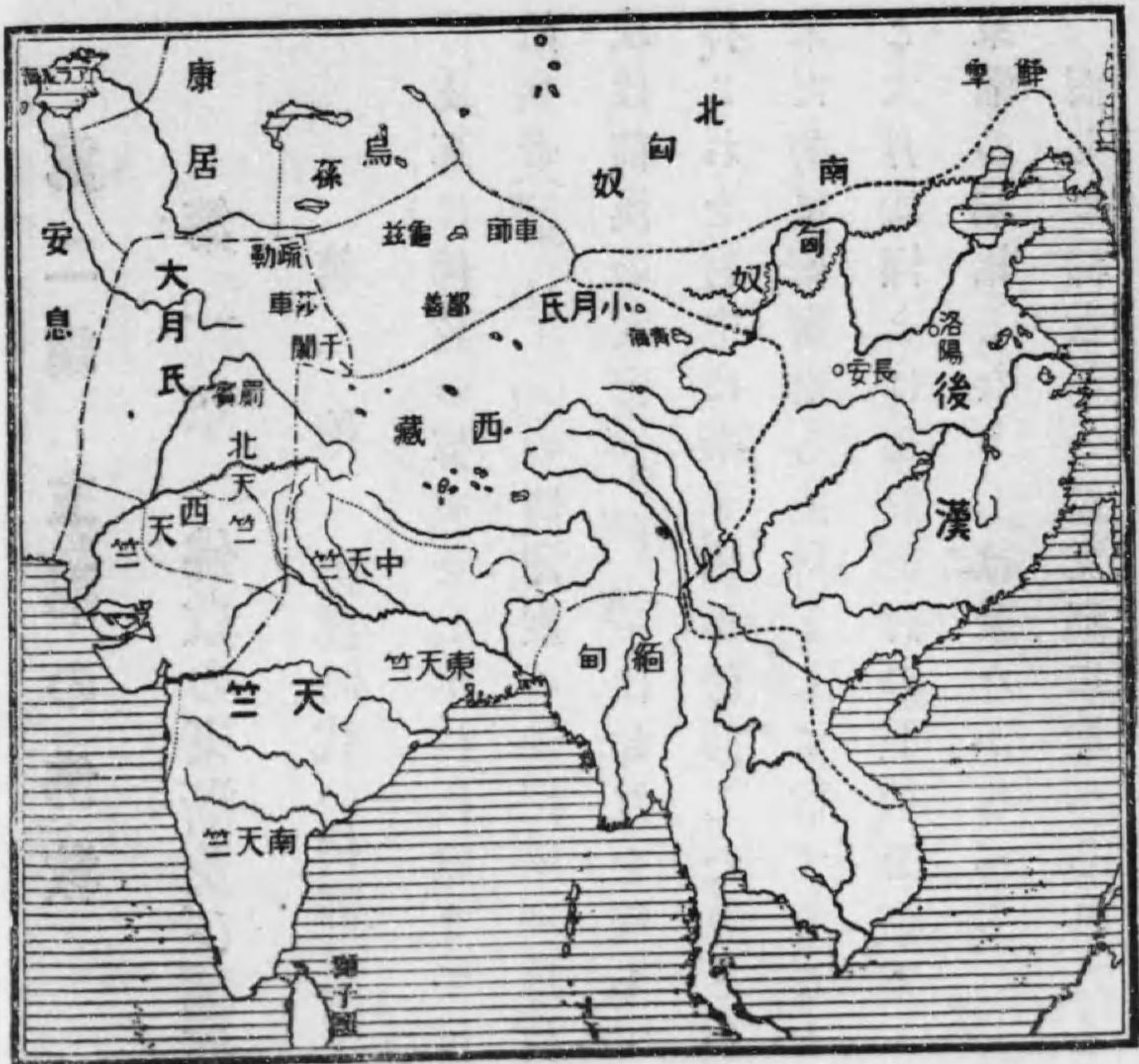
#### 第一節 後漢時代の傳譯 (西紀二五一—三二一)

支那に佛教の傳來せし年代に就きては異説あり、或は古く秦の始皇帝(西紀二四六—二一〇前)の時、印度の沙門室利房は經典を傳へたりといひ、或は前漢の武帝(西紀一四〇—八七前)は匈奴を征して甘肅の西に於て佛像を得、これを宮中に奉じ、燒香禮拜したりといふ。然れどもこれ等は未だ共に確實なる史料として信ずること能はず。されども、支那と大月氏國とは匈奴征討の盟約を企て、より交通の途開け、佛教東漸の端緒となりしは疑なかるべし。

而して佛教が公然支那に迎へられたるは、後漢の明帝永平十年

佛教東漸の  
異説

佛教の公傳



後漢時代の亞細亞

(西紀六七)にして、明帝は一夜、金人飛來して殿庭に下るを夢み、これをトせしめたるに、これ天竺の佛ならんと奏上しければ、帝は蔡愔、秦景等十八人を大月氏國に遣して佛教を求めしめたり。

蔡愔等は佛像經論を白馬に乗せ、迦葉摩騰、竺法蘭の二人を伴ひて還りしかば、帝は

譯經事業

和道儒佛の融

大に喜び、洛陽西雍門外に白馬寺を建て、二僧を迎へて住せしめたり、これ支那佛教傳來の起原にして、支那に寺院あるの始めとなす。

摩騰法蘭二人の事蹟は詳ならずとも、現存の『四十二章經』は、この二人に翻譯せられ、支那譯經最初のものとして有名なり。その後約七十年を経て安世高、支婁迦讖等相次で洛陽に來るに及び、譯經事業は始めて盛なるに至れり、安世高は安息國の王子なるが、出家して小乘阿毘曇の學に達し、桓帝の建和元年(西紀一四七)洛陽に來りて『無量壽經』等數十部の經を譯せり。支婁迦讖は月支國の人にして、桓帝の永康元年(西紀一六七)洛陽に來り、『無量清淨平等覺經』、『首楞嚴經』等多くの大乗經典を譯出せり、その他竺佛朔、支曜等の譯經僧は陸續として來り譯出せしもの總じて三百餘部に及びたりといふ。

斯く佛教は新に東漸せしが、支那舊來の道教徒はこれを快とせず、永平十四年正月一日、五嶽十八山の道士は上表して、釋道二經を

民間佛事の  
始め

火驗し、道教の法力敗れたることありしが、佛教の盛なると共に、その反目は依然たり、然るに獻帝の初平二年(西紀一九一)に至りて、儒者の牟子は、佛教に歸依して『理惑論』を作り、佛教の妙諦を説きて始めて道儒佛三教の融和を圖りたり。

斯くて佛教は漸く人心に浸染するの傾向となりしが、初平四年(西紀一九三)に至りて、笮嗣は自ら佛堂を起して誦經し、大法會を行ひて廣く民間に佛教を弘めたり、これを民間佛事あるの始とす。

第一一節 三國時代の譯經 (西紀二二一—二八〇)

三國時代

後漢滅びて後は、曹操の子曹丕は、揚子江以北に魏國を建て、洛陽に都し、孫權は江南に吳國を建て、建業に都し、劉備は西方一帯の地に蜀漢國を建て、成都に都し、天下を三分して相對峙したり、これを三國時代といふ。

魏の佛教

曇訶迦羅

康僧鎧

三國時代に於ける佛教は、蜀には未だその傳播を見ざりしが、魏吳二國には多くの譯經僧印度より來りて盛に行はれたり、魏國にては、廢帝の嘉平二年(二五〇)中天竺の曇訶迦羅は洛陽に來り、曇無諦と共に四分律によりて始めて受戒の作法を行ひ、その四年(二五二)には、康居國の康僧鎧は洛陽に來りて『無量壽經』を翻譯せり、蓋し『無量壽經』はその異譯甚だ多けれども、後世淨土教の諸宗は皆、康僧鎧の譯本を正所依とするより見れば、その譯述は最もよく經旨を發揮せるものといふべし。

朱子行の講經

支那僧入竺  
求法の始め

經典翻譯に多忙を極めたる從來の佛教は、未だこれを衆の爲に講ずることなかりしが、その當時漢人なる朱子行は始めて、竺佛朔の譯したる『道行般若經』を講じたり、然るに意の通じ難きものありしかば、廢帝の甘露五年(二六〇)自ら梵本を求めんとして、于闐國に入り、梵本九十章を携へて歸來せり、これ支那僧の西城に求法したる



吳の佛教

支謙

康僧會

南方佛教の起原

西晋の統一

始めなり。

吳國にては、曩きに父と共に漢に歸化したる月支國の支謙は、天下亂るゝに及びて吳の建業に難を避け、『大阿彌陀經』を始めとして多くの經典を譯出したたり。吳主孫權はその博學を聞き、召して太子を輔導せしめたりといふ。

支謙に後るゝこと幾ならずして、康居國の沙門康僧會あり、赤烏十年（二四七）建業に入りて法を説くや、孫權の歸向厚く、遂に建業に建初寺を建て、これに住せしめたり、これ江南に寺院あるの始めにして、又南方佛教の起原なりとす。

### 第三節 西晋時代の譯經（西紀二八〇—三二六）

三國は相鼎立して攻争せしが、遂に蜀は魏に滅され、魏も亦司馬炎に篡はる、司馬炎は、更に吳を併せて天下を一統し洛陽に都せり

譯經家輩出

竺法護

これを西晋の武帝といふ。

西晋時代の佛教は、唯多くの譯經家が盛に經典を譯出せし外、特筆すべきものなし、其重なるものは、竺法護、無羅叉、竺叔蘭等なりとす、竺法護は羅什以前の大翻譯家にして、『般若經』、『維摩經』、『大集經』、『正法華經』等を始めとして百七十五部三百五十四卷を譯出し、その博學なること、外國の異言三十六種に通じたりといふ、熾煌の人なりしかば世に尊んで熾煌菩薩といへり。

## 第二章 支那佛教傳播時代……五胡、東晋、南北朝

### 第一節 東晋時代の佛教（西紀三一七—四二〇）

三國時代より支那内地に侵入したる塞外夷族は、その勢漸次強大となり、遂に西晋を滅し江北一帯の地を占領せり。かくて北地

西晋滅後の状況

は五胡十六國の騷亂相次ぎ、南地は東晋これを統一して僅かに平安なるを得たり。この間に於ける佛敎は、北地に在りては、苻姚二秦の首都長安を中心として傳譯盛に行はれ、南地に在りては東晋の首都建業及び廬山を中心として弘布するに至れり。

### 第一項 苻姚二秦の傳譯

西晋の滅后北地にありては、前趙に次で石勒は後趙を建てしが、その頃洛陽には西域の沙門佛圖澄來れり。佛圖澄は當時百餘歳の高齡にして能く咒文を誦し、神變を現ずること妙なりしかば、衆の歸仰を得、且つ國主石勒石虎の尊信を受くること厚く、その德譽は四方に響きて門弟多く集りたり、道安、法和、法汰等はその重なるものなりしが、後趙亂るゝに及びて、門下は四散して各々難を避け、法和は弟子と共に蜀地に入り、竺法汰は江に沿ひて遠く揚州に赴

佛圖澄の入洛

苻秦時代の譯經僧

小乘阿毘曇の傳譯

き、道安は慧遠以下四百人の弟子を率ゐて襄陽に遁れたり。

後趙の滅後、前秦の苻健は都を長安に奠め、苻生より苻堅に至りてその勢隆盛を極めしが、この間に於て、僧伽跋澄、僧伽提婆、曇摩難提、佛陀耶舍、竺佛念等多くの譯經僧は長安に來り、主として小乘毘曇宗經論の翻譯に従事したり。

僧伽跋澄は、竺佛念と共に『大毘婆娑論』を譯せしかども、苻秦滅亡の爲にこれを完成すること能はざりしかば、僧伽提婆はこれを修正して『阿毘曇八健度論』(卷二十)を譯出し、支那に毘曇宗根本聖典あるの始めをなせり、僧伽提婆は、又前に曇摩難陀の譯したる『中阿含經』、『增一阿含經』に修正を加へて改譯し、佛陀耶舍は、『四分律』及び『長阿含經』を譯してその名ありしが、梵漢兩語に通じてこれ等譯經僧を助け、その翻譯を全からしめたるものは實に竺佛念なりとす。されば竺佛念は僧伽提婆と共に小乘經典及び阿毘曇の傳譯には最も

道安及法和

功勞ありし人なり。

竺佛念と共に苻秦の世に在りて譯經に關與し、功ありしものは佛圖澄門下の道安及び法和なりとす、道安は後趙の亂れたる時、襄陽に遁れて留ること十五年、當時學名高き儒士習鑿齒等と親交を結びて德譽甚だ高かりしが、前秦の苻堅襄陽を攻略するや、弟子慧遠と別れ、苻堅に迎へられて長安に入りたり。道安長安に在るや、常に般若の諸經を講じて學徒を教養せしが、法和また蜀より來りて譯經の業を助け、非凡の文才を以て文義を修正し、所謂潤文の任に當りたり。而して道安は命を受けて多くの經論に序文を製し、又經論の解釋に序、正、流通の三分科を設けて講學を容易ならしめ、或は『綜理衆經目錄』を編纂して後學の便を計りたるが如き著しき功績ありき。

道安の功績

姚秦時代の傳譯

苻秦に代りて長安に都せしは姚秦にして、その時代には、鳩摩羅

鳩摩羅什

什の入關によりて大乘經典の傳譯盛に行はれ、支那譯經史上に一大時期を劃すると共に、その面目を一新して講學の新天地を開くに至れり。

鳩摩羅什は童壽と號じ、龜茲國の人なり、七才にして母と共に出家し、諸德を歴訪して小乗教を學びたりしが、莎車國の王子須耶利蘇摩に就きて始めて始めて龍樹所說の大乘空宗を聞き、小乗を捨て、大乘教に歸したり。

羅什入關の緣由

その頃支那は前秦の苻堅長安に在りて武威を張り、隣邦を窺ふと共に又博識の士を求めて文化の移植に努めたり、この時羅什の名聲を傳聞したる苻堅は、將軍呂光を遣して龜茲國を討ち、羅什を迎へんとしたり。呂光は龜茲國に至り命の如く羅什を得て涼州に凱旋するや、苻堅は害に遭て苻秦滅亡し、姚秦新に起ちて長安に在るを聞き、呂光は姑藏に留りて王と稱し、國を建て、後涼と號し

羅什の翻譯

たり。羅什は姑藏に留ること前後十八年なりしが、涼王は佛教に志なきが爲に、徒に歲月を送りたり。後秦の姚興兵を遣して後涼を討つに及び、羅什は姚興に迎へられて長安に入ることを得たり。時に弘始三年（四〇二）にして羅什は五十八歳なりきといふ。

羅什を得たる姚興は大に喜び、遇するに國師の禮を以てし、西明閣及び逍遙園を以て譯經の道場として羅什に與へしかば、羅什は専ら譯業に従事し、經の『般若經』『法華經』『阿彌陀經』を始めとし、論の『中論』『百論』『十二門論』『智度論』『成實論』等、又律の『十誦律』等三藏の要部を盡く譯出し、七十餘部三百餘卷の多きに達したり。

羅什の門下は三千と稱せられ、譯經の盛なると共に、經論を講じてこれを弘通すること、佛教東漸以來の盛況を呈し、門下の俊足も甚だ多く、殊に道融、僧叡、僧肇、道生の四人は關中の四傑と稱せられて最も名ありき。

關中の四傑

第二項 法顯の入竺及び江南の佛教

入竺求法

苻姚二秦の傳譯事業盛んに行はるゝや、その間に或は全譯を得ざるものあり、或は意義の通ぜざるものありしかば、進んで印度本國に入り、梵本を求めんとする者漸く多く、法賢、智嚴、寶雲等はその重なるものなり。

法賢の入竺

法賢は平陽の人にして、志行明敏持戒堅固なりしが、常に經律の缺失あるを慨し、東晋の隆安三年（三九三）入竺求法を志し、慧景、道整等の同志數人と共に長安を發したり。

入竺の困難

途上智嚴、寶雲等の入竺するに會し大に意を強くせしが、流沙を渡るに及び上には飛鳥なく下には走獸なく、四顧茫茫として路を失ひ、僅かに日の出沒によりて東西を辨じ、人骨の跡を見て行路を定め、辛うじて干闥に達したり、然れども葱嶺の嶮を越えんとして



積雪の艱難に會ひ、寒風肌に迫りて進む能はず、遂に慧景は倒れて凍死せりといふ。

入竺の困難により同行者中或は志を挫き或は途に死して印度に達したる者は法顯一人のみなりしが、法賢はあまねく佛蹟を巡拜して梵典を求め、留ること三年にして錫崙に渡り、こゝに居ること二年多くの梵書を携へて海路より歸途に就きしが、途中暴風に遇ひ辛うじて山東

省青州の海岸に着くことを得たり。時に東晋義熙九年（四一三）長安を發してより十五年の歳月を費したり。

法賢はこれより建康道場寺に入り、携へ歸れる『摩訶僧祇律』方等泥洹經『雜阿含經』等を譯出せしが、その後、荊州に至り八十六歳を以て入寂せり。その著すところの旅行記には備に入竺中の見聞を記述し『佛國記』又は『法顯傳』と稱せられて有名なり。

これより先東晋の初めに於て、南地に佛教を興隆し、その中心をなしたるものは廬山の慧遠なりとす。慧遠は雁門の人にして、弟慧持と共に道安に就きて出家し、戒行進むに隨ひて道安門下の首座となりたり。前秦の苻堅が襄陽を陥れ、師の道安を迎へて長安に去るや、慧遠は亂を避けて遙に南方羅浮山に去らむとし、途次廬山の閑寂なるを賞してこれに登りたり。時に同門の慧永は先に廬山に登りて西林寺に在りしが、慧遠の來るを見て大に喜び、刺史

法顯の傳譯  
佛國記

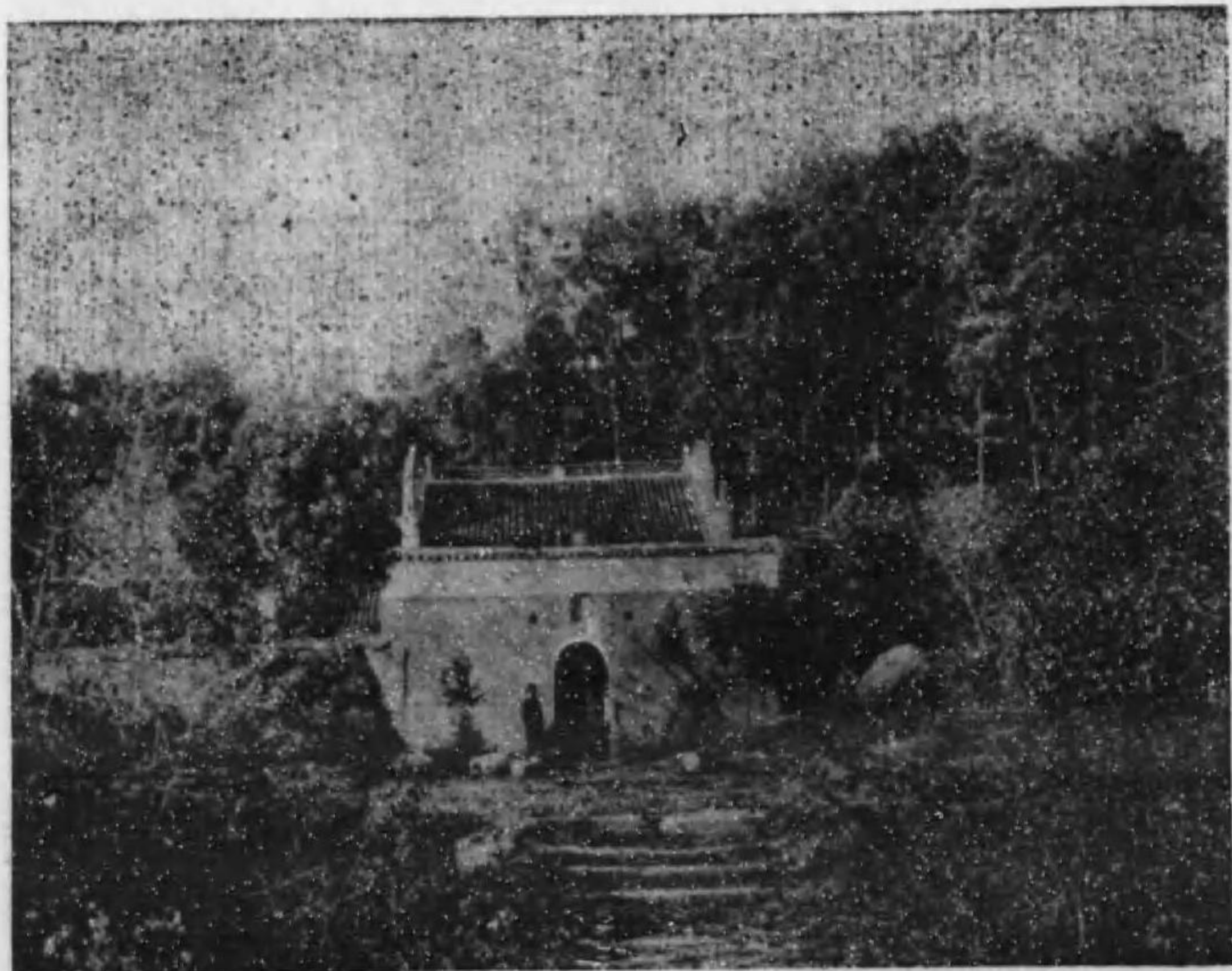
南地佛教の  
興隆

慧遠廬山に  
入る

廬山の教學

桓尹に勧めて慧遠の爲に東林寺を建てしめたり。

慧遠の東林寺に幽居するや、その徳望を慕ひて僧俗の山中に集るもの甚だ多く、僧伽提婆の遠く長安より來れるを始めとして、佛陀耶舍、佛陀跋陀羅(覺賢)等も亦來りて翻譯の業に従ひ、梵本の不備を告るに及びては、弟子支法領を西域に遣して梵典を求めしめ、慧遠自ら『法性論』を著して涅槃常住の説を主張し



廬山東林寺

白蓮社

或は『沙門不敬王者論』を作りて沙門の權威を高潮するなど、廬山の教學は隆盛を極めたり。

廬山流の念佛

慧遠は東晋の孝武帝太元十五年(三九〇)同信の縑素と共に白蓮社を結び、阿彌陀佛の尊前に定心念佛を修し、以て淨土の往生を期したり。これ蓋し支那淨土教の始めにして、所謂廬山流の念佛と稱するものこれなり、白蓮社には同志の僧俗合して百二十三人ありしが、就中慧遠、慧永、慧持、道生、僧叡、曇順、曇恒、道、曇詵、道教、佛陀耶舍、佛陀跋陀羅、劉程之、張野、周續之、張全、宗炳、雷次宗の十八人はこれを廬山の十八賢人と稱す。

慧遠は當時姚興に迎へられたる羅什と、遙かに書を相寄せて好みを通じたりしが、東晋の義熙十三年(四一七)八十八才にして寂せり。

建康の譯場

廬山と共に南方佛教の二大中心をなしたるは國都建康にして

覺賢三藏

その譯場は學者の淵叢をなし、佛陀跋陀羅即ち覺賢三藏はその重なるものなり。

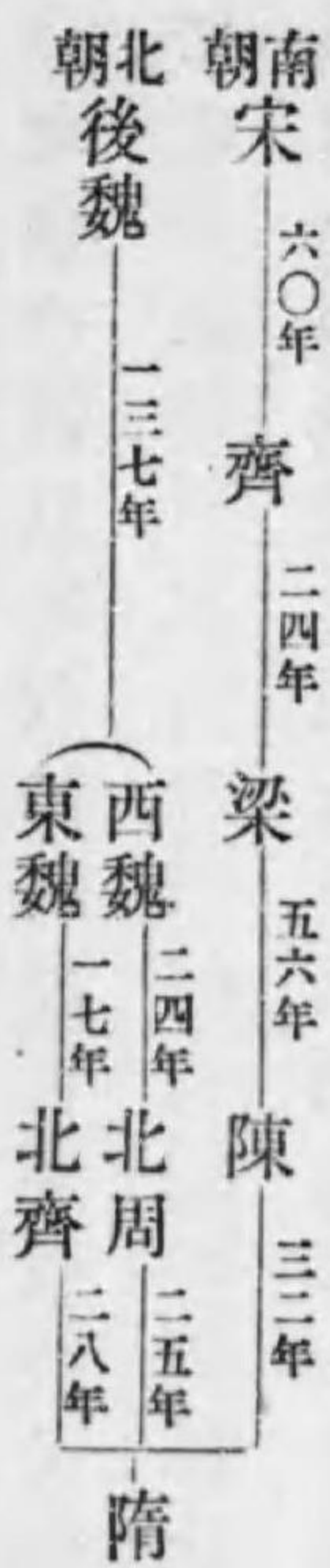
覺賢は罽賓の人にして禪觀を以て名ありしが、入竺求法したる智嚴の屈請によりて、海路支那に來れり。當時長安に於ける羅什の名聲は高かりしが、覺賢も亦長安に入るや、秦主迎へて長安大寺に居らしめたり。覺賢の門下漸く盛なるに及び羅什の門下と相反目するに至る。こゝに於て覺賢はその徒を散じて、南方廬山に向ひ、慧遠の下に在りて、有名なる『達磨達羅禪經』等を譯したり。廬山に留ること數年にして江陵に遊化し、更に轉じて建康の道場寺に入り、盛に經論の譯出に努めたり、法賢、法雲、智嚴等の當時の名僧は皆覺賢を中心として其門に聚り、その譯經に與かりしかば、建康道場寺は南方佛教の譯場として、隱然重きをなせり。覺賢の譯として有名なる『六十華嚴』の原本は、慧遠の弟子、支法領の干闥より將來

せるもの、又『僧祇律』の梵本は法賢の印度より携へ來るところなりといふ。

第二節 南北朝時代の佛教 (西紀四二〇—五八八)

宋及び後魏の興起

江南に在りし東晋は、淝水の戦後内亂相踵ぎしが、劉裕は遂にこれを鎮定して、帝位に建康に即きたり(四二〇)これを宋の武帝といふ。江北に在りては、後秦の滅後多くの小國前後に分立せしが、鮮卑の拓跋珪は後魏國を建て、平城に都し、大武帝に至りて、遂に江北の諸國を一統せり(四三九)是に於て支那は分れて南北兩大國となり、江北を北朝、江南を南朝と稱して隋の統一に至るまで凡そ百五十年の間に左の如き變遷を見たり。



南北の地理  
的影響

南北朝の對立時代に於て、南朝は多く海路より直ちに佛教を傳へて建康に榮え、北朝は西域交通の關係上陸路より佛教を傳へて洛陽にその隆盛を見たり。而して南地は老莊の流行地として理論を尙び、北地は孔孟の發祥地として實際を主とする傾向ありしかば、佛教も亦これ等の影響を受けて禪、攝論の海路より傳りて北地に流布するあり、又毘曇、三論、成實、涅槃、淨土、地論等の諸宗派興りしが、三論、成實、涅槃等は北地の思想に適せず、却つて南地に移りて榮えたり。

### 第一項 南朝佛教の隆盛

宋の佛教

宋は武帝に次ぎて文帝位に即きしが、文帝は深く佛教を喜び、その在位三十年間は佛教の保護に努めたり。當時は道生、惠觀、法顯、寶雲、智嚴等、東晋以來の高僧、猶多く世に在り、加ふるに佛陀什、晁良

耶舍、求那跋陀羅等、陸續首都建康に來りしかば、譯業亦甚だ盛に行はれたり。

佛陀什は、法顯の印度より携へ來りし『五分律』を譯してその名高く、晁良耶舍は、西域より流沙の險を冒して陸路建康に來り、現行の『觀無量壽經』(卷一)を譯して、後の淨土教に大なる影響を與へ、又、求那跋陀羅は、中天竺の人にして海路より入宋し、譯するところの經典多かりしが、『雜阿含經』の譯出は最も注目すべく、既に譯せられたる『長阿含』、『中阿含』、『增一阿含』と共に四阿含經として完成したり。

齊の教佛

宋は六十年にして齊となりしが、齊朝の歷代また厚く佛教を保護し、高帝は自ら莊嚴寺に幸して僧遠の『維摩經』を講ずるを聽き、武帝は法猷、法暢をして朝政に參與せしめ、當時これを黑衣の二傑と稱せられたり。又文宣帝は僧柔、慧次等の高僧を招きて佛乘を講ぜしめ、自ら『淨住子』三十一篇を著したりといふ。



梁の佛教

齊の世を保つこと二十餘年、その間、曇摩伽陀耶舎は『無量壽經』を譯し、僧伽跋陀羅は『善見律』を譯し、達磨摩提は『法華經』の提婆品を譯せるは、譯經の重なるものなり。

齊に次で立ちたる梁の武帝は、南朝歷代の帝王中最も奉佛の念篤かりし人なり。始めは道教を喜びしも、天監三年（五〇四）道俗二萬人を率ゐて重雲殿に昇り、親く捨道奉佛の儀式を行ひて以來は佛教を尊信すること深く、光宅寺を始めとして、鐘山の大愛敬寺、開善寺及び同泰寺、長干寺等を造營して佛教の興隆に努めたり、帝の長子昭明太子も亦崇佛の念、父帝に劣らず、宮中に慧義殿を建て、多くの名僧を接禮して眞俗二諦を講論し、自ら『解二諦義』の選述ありしが、不幸、中大通三年（五三二）父帝に先ちて薨じたり。

梁の三大法師

武帝の殊遇を蒙りたる高僧には、寶誌禪師及び傳大士等ありしが、光宅寺の法雲、開善寺の智藏、莊嚴寺の僧旻は『成實論』の學者とし

て名聲最も高く、帝亦深くこれに歸依せしかば、世に梁の三大法師といふ。その他梁代の學者として、建初寺の僧祐は『出三藏記』、弘明



嵩山小竹林寺

集等を編纂し、その弟子寶唱は『名僧傳』を撰述し、嘉祥寺の惠皎は『高僧傳』を撰して僧傳完成の始めをなし、共にその名を振ひたり。

普通元年（五

二〇）南天竺の菩提達磨、海路廣州に來り武帝に謁して、聖諦第一義

菩提達磨

陳の佛教

の問答をなせしが、帝はその玄旨を悟ること能はず、達磨は梁を去りて北地後魏に至り、嵩山の小林寺に住して終日面壁し、支那禪宗の起原をなせり。後魏の孝明帝はこれを招くこと再三なりしかども、遂に小林寺を出でずして、梁の大同元年（五三五）示寂せり。

梁より陳の間に支那に來り譯經史上最も重要な地位を占めたるものは眞諦三藏なりとす。眞諦は西天竺の人にして、武帝の大清元年（五四七）海路より建康に來りしが、候景の亂に武帝は憤死し、幾もなくして梁亡び陳起るの時なりしかば、眞諦は國に還らんと欲して廣州制止寺に至れり。されど沙門東愷等の請によりて漸く留錫することとなり、極めて不安と苦痛の間に多くの經論の翻譯に従事したり。『大乘起信論』『攝大乘論』『攝大乘論釋』『俱舍釋論』等はその主なるものにして、殊に『攝論』の譯出によりてこゝに攝論宗の起原をなせり。

眞諦三藏

惠思禪師

陳の世には北齊より轉じて來れる惠思禪師あり、禪師は豫州武津の人、北齊の惠文禪師に師事し、法華の法門を授りたる後、南遊して荊州の南岳に入り、『大乘止觀法門』『法華經安樂行義』等を著して、専ら法華の妙旨を説き、その法門は、弟子智顛に大成せられ、天台宗開立の先驅をなせり。

### 第二一項 北朝の興佛破佛

北凉の佛教

北地に於ける五胡の騷亂は、後魏の道武帝、平定統一せしが、これより先、長安には羅什の名聲天下を壓し、建康には覺賢ありて一方に雄視せる頃、長安の西北に當れる北凉には曇無讖來りて盛に經典を翻譯せり。その譯したる『涅槃經』は、羅什の『般若經』『法華經』及び覺賢の『華嚴經』と共に、五胡時代の四大翻譯と稱せられたり。

曇無讖の涅槃經翻譯

曇無讖は中印度の人、北凉の元始元年（四二二）北凉主蒙遜に迎へ

られて姑藏に來り、漢語を學習すること三年の後、『涅槃經』の翻譯に従事したり。されど携ふるところの梵本は初の一部分にして完本にあらざりしかば、中頃本國に還りてその餘品を求め、再び涼に來りて四十卷の涅槃經を譯成せり。然るになほ後品ありとの説を聞き、再びそれを求めんと北涼を出でんとするや、蒙遜はその志を疑ひ人をして途にこれを害せしめたり、時に年四十九なりきといふ。

後魏の佛教

太武帝の破佛

後魏の太祖道武帝及び明元帝(代)は共に佛教を尊信すること厚かりしが、大武帝(代)に至りて痛く佛教に迫害を加へたり。太武帝は幼くして即位せしが、補佐の任に當りたる崔皓は、道士寇謙之と共に道教を宣揚せんとして、屢々帝に勸むるに佛教を除かんことを以てせり。偶々邊境に反亂起り、武帝親征して長安の一佛寺に入りしに、武器財寶を藏せしかば、これ亂徒に通ずるものと速斷し

魏武の法難

て直ちに寺僧を殺戮せり。崔皓等は好機乗ずべしとなし、帝に勸めて盡く長安の沙門を殺し、佛堂經藏を破壊せしめ、大平眞君七年(四四六)には破佛の詔勅を下し、佛像經卷を燒棄し沙門を坑殺して、その領内には一切佛教を奉ずることを禁じたり、これ支那佛教史上破佛の凄慘を極めたる最初にして、古來三武一宗の法難と稱せらるゝ中、第一魏武の法難なり。

太武帝の悔恨

魏武の法難に際し、その太子は奉佛の念厚く、再三上表して暴舉を諫止せんとしたれども終に用ひられざりしかば、遠近の僧俗に密に使を派して佛像經論等を隱匿せしめ、僅かにその難を逸れしめたり。偶々帝は沙門惠始を捕へてこれを斬りしに、少しも傷くことなく、更にこれを虎に與ふるも虎は食はざりしかば、帝は始めて佛法の威力、道教に勝れることを悟りて深く懺悔したり。その後帝は惡瘡を病みてこれを破佛の罪報なりと思念し、佛教復興の

佛教の復興

雲嵐の石崖



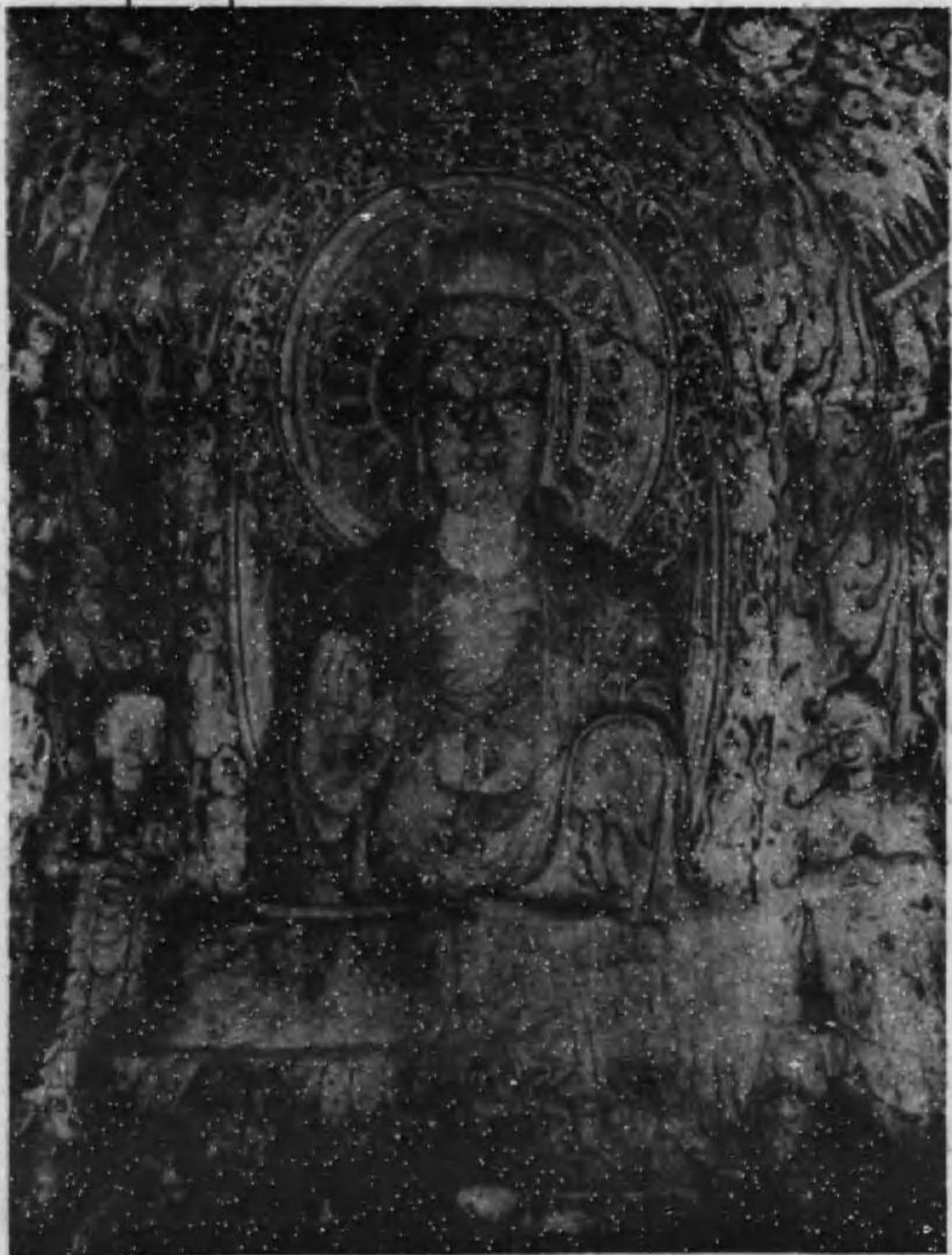
雲嵐の遺跡

勅を下したれども、遂に悔恨の情に堪へずして悶死せりといふ。

文成帝(代四)嗣ぎて立ち、奉佛の念深くして、佛教の興隆を圖りしかば、破壊せられたる佛堂伽藍は漸く舊觀に復し、隱匿せられたる佛像經論は再び世に出てたり、當時、曇曜は帝の歸嚮厚く、召されて平城に入り、衆僧を統御せしが、平城の南北三十里に石崖を鑿ち

龍門の石佛

て佛寺を建立し、その精巧は一世に冠絶せりといふ、今猶雲嵐の遺跡として存在せり。其後歴代の帝王は佛教を外護すること甚だ厚く、殊に孝文帝(代六)は發願して洛陽附近なる龍門山に無數の石佛を刻せしめ、六朝藝術の精華を至せり。かくて宣武(代七)孝明(代八)の二帝の頃には、勒那摩提、菩提流支、佛陀扇多等の譯經僧印度より來りて、經論の譯出に努めしかば、北朝佛教の隆盛は頂點に達したり。



龍門の石佛

菩提流支

十地論の譯

菩提流支は北印度の人にして、宣武帝の永平元年（五〇八）洛陽に來りて永寧寺に住し。爾來二十八年間専ら翻譯の業に従ひ、重要な經論を多く譯出せるが『十地論』『淨土論』はその主なるものなり。勒那摩提、菩提流支の二人は、初め共に勅を奉じて『十地論』を譯せしに、佛陀扇多是譯語者となり、宣武帝は親ら筆授の任に當りしが、勒那摩提と菩提流支の所見同じからざるものあり、遂に二人をして各別にこれを譯せしめたり、佛陀扇多の弟子惠光即ち光統律師はその譯場に列して、よく兩者の論點を觀察し、帝に奏請して自ら梵本を解し、この兩論を合糅して一本となせり、これ現存の『十地論』にして、地論宗所依の論なれば光統律師は地論宗の祖と仰かるゝなり。

東魏の佛教

宣武帝の後、幾もなくして後魏は東西に分れ、東魏の孝靜帝は都を鄴に遷し、西魏の孝武帝は都を長安に奠めたり、この間に出て、

曇鸞大師

天下の民心を風靡せるは曇鸞大師なりとす。

曇鸞は後魏の孝文帝承明元年（四七六）雁門に生れ、十五歳出家の後、専ら四論の學を修めてその奥義に達せしが、嘗て大集經の註釋を作らんとして病を得たれば、長命の法を求めんと欲して梁に赴き、陶隱居に會ひて『仙經』十卷と長生の方術とを受け、喜びて後魏に歸れり。偶々洛陽に至るや、途上菩提流支と會し長生の方術として佛法中この『仙經』に優るものありやと質せり。流支は言下に地に唾してその迷妄を開き、『淨土論』一卷を授けて長生不死の神方は佛教に如くなきことを諭したるに、曇鸞はこれを覩て前非を悔ひ、直ちに仙經を燒き棄て、深く淨土の法門に歸したり。

曇鸞の徳化

爾來曇鸞は并州の大巖寺、又汾州の玄忠寺に住して盛に淨土念佛の法門を弘通し、菩提流支の譯したる『淨土論』を釋して『往生論註』を作り、その他『讚阿彌陀佛偈』等の著ありて自行化他怠らず、東魏の

孝靜帝は大師の徳に歸して神鸞と尊稱し、梁の武帝は常に北面して鸞菩薩と禮拜したり、大師は東魏の興和四年（五四二）六十七歳にして汾州の遙山寺に寂したり、これ支那淨土教三流の一にして善導流念佛の起原なり。

## 北齊の佛教

東魏は北齊の世となりしが、これより先、南地金陵の道士に陸修靜といふものあり、宋齊の間に聲望ありしが、梁の武帝に退けられて北齊に入り、權門に結び金玉を散し以て道教の宣揚に努めたり、北齊の文宣帝は素より佛教を奉じたれども、陸修靜の進言と廷臣の勸説とによりてその取捨に迷ひ、遂に沙門道士の學徳あるものを招集して佛教と道教との優劣を決せしめんとしたり。

## 道士の法論

先づ道士は方術を施して大に成功し、上下の賞讃を博したれば帝は上統法師に命じてこれと法力を競はしめんとせるに、上統は末座の曇顯をして對抗せしめ、奇拔なる方術を以て道教を屈服せしめたり。

## 北周佛教の破滅

しめたり。茲に於て帝は直ちに道教を廢して佛教を保護せしかば、北齊の佛教は順調に教理の發達を遂るに至れり。

北齊の教運順調なるに反して、西魏に代れる北周の佛教は又大厄難を蒙るに至れり。孝閔孝明二帝は、佛教に志厚かりしが、武帝<sup>(三)</sup>即位するに及びて道士張賓之の言を信じ、道教を好みて破佛の企を起したるに、司隸大夫甄鸞は『笑道論』を著して破佛の妄を辨じ、釋道安も『二教論』を作りて甚しく反對せしかば、帝は道佛二教を共に廢すと稱し、建徳三年（五七四）令を下して經像を毀ち沙門道士二百餘萬を還俗せしめたり、されども道教の破滅は一時の口實にして帝の素志にあらず、問もなく帝は通道館を建て、釋道の名徳あるものを拔擢して百二十員を置きしが、沙門にしてその選に與かるもの甚だ少く、事實上北周の佛教は破滅に歸したり。

武帝は、建徳七年（五七八）北齊を滅ぼし、又破佛の令を下して北齊

周武の法難

の佛教をも滅せんとせしかば、惠光の弟子慧遠は奮然として蹶起し、抗論頗る壯烈なりしが、事遂に成らず、帝の暴令は四萬の寺院を分ちて王公の邸宅として賜ひ、三百餘萬の僧尼は盡く還俗せしめられたり、これを第二武の法難、又は周武の法難といふ。

佛教の復興

當時北周の沙門に道林といふものあり、博學を以て武帝に接近することを得たりしかば、死を期して大法の復興を上表し、論戰すること二十餘日、遂に帝の志を動して佛教の復興を諾せしめられたれども、日ならずして帝は病を得て歿したれば事成らず、宣帝<sup>(四)</sup>立ち大成元年<sup>(五七九)</sup>教法復興の勅を出せしが、武帝破佛の後を受けて容易に舊觀に復すること能はず、靜帝<sup>(五)</sup>も亦その復興を志し、が周の國運既に傾きて隋の世となれり。

第三項 南北朝時代の諸宗派

諸宗派の基礎

佛教の東漸以來、多くの經論翻譯せらるゝと共に、諸宗派の傳譯も亦盛に行はれて、南北朝時代には毘曇、三論、成實、律、涅槃、地論、淨土、禪、攝論等の九宗の多きに達したり、これ等の諸宗は未だ獨立したる一宗としての形態を具備せるものにあらず、寧ろその多くは學派として弘傳せられたれども、後世隆盛を極めたる隋唐時代の諸宗派の基礎をなせり。

(一) 毘曇宗

漢末に支那に來りし譯經家の多くは、小乗教の典籍を傳譯したれども、當時は未だ系統的なる翻譯にあらずして、混沌たる状態にありしが、苻姚二秦の時代に入り、罽賓の譯經家陸續として長安に來るに及びて、毘曇宗の傳譯は盛に行はれたり。

毘曇宗は小乗佛教中最も正統派と稱せらるゝ、有部宗の教義を傳承せるものにして、苻秦の建元十七年、僧伽跋澄は長安に來り、竺

毘曇宗典の傳譯

佛念と共に『毘婆娑論』を譯し始めたれども、適々苻秦覆滅の難に遇ひて果すこと能はざりしが、姚秦の世に至りて僧伽提婆は竺佛念と共にこれを修正改譯して『阿毘曇八健度論』三十卷となせり、これを支那に毘曇宗の典籍あるの始めとなす。

その後僧伽提婆は又法勝の『阿毘曇心論』を譯出し、宋の時に至りて佛陀跋摩は『阿毘曇毘婆娑論』(卷一百)を譯し、僧伽跋摩は『雜阿毘曇心論』(卷十二)を譯し、求那跋陀羅は『衆事分阿毘曇論』(卷十二)を譯出して、毘曇宗の傳譯は盛に行はれ、講學も亦稍々盛なりしが、特殊の研究あるにあらずして、傳譯事業を主としたれば、後世一宗として盛なるに至らざりき。

(二) 三論宗

三論の傳譯

『中論』『百論』『十二門論』を所依とする三論宗は、羅什長安に在りて、姚秦の弘始六年(四〇四)『百論』(卷三)を、弘始十一年(四〇九)『中論』(卷四)『十二門論』

南地三論  
北地の三論

(卷一)を譯してより龍樹提婆の三論空宗は支那に傳へられたり。羅什の門下、三論の教系を承けてそれを弘通したる者甚多けれども、就中道融、僧肇、僧叡、道生の關中の四傑はその最もなるものにして、道融、僧肇の二人は關中に留りて北地に三論を弘め、僧叡、道生の二人は建康に入りて南地に三論を弘通せり、而して北地の三論は羅什の譯したる『大智度論』(卷一百)を加へて四論宗となれり。彼の北魏の曇鸞の如きはこの教系に屬す。

古三論  
新三論

南地の三論は道生より曇濟、道朗を経て梁の僧詮に傳はりたり、僧詮の時代には『十地論』『攝大乘論』等の影響を受け積極的説明を加へて面目を一新せしかば、僧詮以前を古三論といひ、僧詮以後を新三論と稱す。新三論の僧詮門下には法朗あり、法朗は陳の永定二年(五五八)金陵に入りて講筵を張りしが、頗る獨創的氣分に富み聽衆は常に二千に餘れりといふ、門下に吉藏あり、吉藏は即ち嘉祥大

三論宗の大成



師にして、隋朝に於て盛に本宗を興し、支那の三論宗を大成せり。

(三) 成 實 宗

成實論の傳  
譯

成實宗は姚秦の弘始十四年(四二二)羅什、長安に在りて成實論(卷廿)を譯し、弟子僧叡に命じて始めてこれを講ぜしめ、僧導は『成實論義疏』を作つて弘めしかば、羅什の門下は盛にこれ講究したり。

成實論講學  
の隆盛

南北朝時代に入りて成實の講究は特に南方に盛にして、宋の明帝は、當時『成實論』に於ては、古今獨歩と稱せられたる道猛を招き、勅して興皇寺にこれを講ぜしめ、帝は親く臨みて物資を賜ひたり、齊の世には僧柔、慧次の二人ありてその名著れ、梁朝に至りて『成實論』の講究は愈々盛にして、梁の三大法師と稱せられたる僧旻、法雲、智藏は、何れも僧柔、慧次の講席より出て、盛に成實論を講ぜしかば、この宗は一時天下を壓倒するの勢を示せり。

成實宗の衰  
頹

然るに陳を経て隋唐の時代に至り、天台、三論等の諸宗盛なるや

成實論を貶して小乗となし、かば、成實論の研究も次第に衰へ、復往時の盛觀を見る能はず、僅かに三論の附宗としてその命脈を保ちたり。

(四) 律 宗

四部の律典

律宗は戒律を本とする宗派にして、印度に在りては根本佛教の分裂と共にその所傳を異にしたれども、支那に傳へられたるは『十誦律』『四分律』『五分律』『僧祇律』の四部なり、これ等の傳譯は、既に三國時代に在りて、曇訶迦羅は『僧祇律』を、曇無諦は『四分律』を譯したれども、組織的にこれ等の傳譯を見たるは羅什の時代なり。

十誦律の傳  
譯

十誦律は薩婆多部の律にして、姚秦の弘始六年(四〇四)羅什は弗若多羅と共にその翻譯に着手したれども、弗若多羅は中途にして滅したれば、一時その譯業を中止せしが、後に曇摩流支來り、廬山慧遠の奨勵を受けて、遂に『十誦律』五十八卷を完譯することを得たり。

僧祇律の傳  
譯五分律の傳

『僧祇律』は大衆部の律にして、東晋の義熙十四年（四一八）佛陀跋陀羅は法顯と共にこれを譯出して四十卷となし、『五分律』は化地部の律にして先に法顯はその梵本を錫崙より將來したれども、未だ譯出なかりしかば、宋の元嘉元年（四二四）に至り、佛陀什これを譯して三十卷となしたり。

四分律の傳  
譯

『四分律』は法藏部の律にして、東晋の義熙八年（四二二）佛陀耶舎は竺佛念と共にこれを譯して六十卷となせり、而して譯後凡そ六十年の間は『十誦律』僧祇律『五分律』専ら盛にして、四分律は一時顧みられざりしが、北魏孝文帝の世、法聰始めて『四分律』を講じてより漸く天下に流行し、その弟子道覆は始めて『四分律疏』（卷三）を作り、齊の初めに出でたる慧光即ち光統律師に至りて、律宗の基礎を築けり。

（五） 涅槃宗

涅槃經の傳  
譯

涅槃宗所依の經たる『涅槃經』の傳譯は、部分的にはしばしば行は

化本涅槃經  
南本涅槃經

れたれども、最も注目すべきものは、法顯の譯したる『大般泥洹經』（卷六）及び曇無讖の譯したる『大般涅槃經』（卷四）なりとす。

曇無讖の『大般涅槃經』が北涼より江南の地に傳はるや、道場寺の慧觀はその全譯にあらざるを歎き、譯者の遺志を嗣ぎて宋文帝の時、道晋を印度に遣してその完本を求めしめんとせしに、道晋は途上に没せしかば、慧觀は慧嚴及び謝靈運と共に、前に法顯の譯したる『大般泥洹經』（卷六）を参考とし、曇無讖譯を訂正して三十六卷の『大般涅槃經』となせり、これより曇無讖の涼譯を北本涅槃經と稱し、南方に於て訂正したるものを南本涅槃經と稱して共に世に行はれたり。

涅槃經の講  
說

南本涅槃經の校訂成るや、慧觀慧嚴の二人は盛にこれを講説し、爾來涅槃宗は宋齊梁陳の間に於て大に流行せり、隋朝に入りて、淨影寺慧遠は『涅槃義記』を著して出色の譽高く、曇延は純然たる涅槃

涅槃經之法華經

學者として亦聲名ありしが、天台宗起るに及び、涅槃經は法華經と同一眞理を説けるものと判ぜられて、その研究は天台學者の手に移り、遂に涅槃宗は獨立を失ひたり。

(六) 地論宗

十地論の傳譯

地論宗は世親菩薩の十地論に基く、而して十地論を支那に傳譯したるは、前に述べたるが如く、勒那摩提及び菩提流支なりしが、二人の各別に譯したる兩本を對照して一本となし、以て地論宗の基をなしたるものは慧光なり。

十地論之華嚴經

慧光は四分律宗の振興者として其名高かりしは既に説けるが、又十地論の玄旨を發揮して、地論宗を大成せり。その門下の淨影寺慧遠は十地經疏を著してその弘通に努めたり。かくて齊より唐に至る一百餘年間は、地論宗の流行時代となりしが、元、地論宗は華嚴經の一部に本づきて、唱道せられたるものなれば唐代に華嚴

淨土の三部經

宗の興るに及びてその消息を絶てり。

(七) 淨土教

淨土教の所依とする經典は、主として無量壽經、觀無量壽經、阿彌陀經の三部にして、その傳譯は佛教初傳の當時より行はれ、無量壽經は前後十二譯の多きに及びたり。而して曹魏の嘉平四年(二五二)康僧鎧の譯したる佛說無量壽經(卷二)、劉宋の元嘉年中(四二四—四五三)晝良耶舍の譯したる佛說觀無量壽經(卷一)、姚秦の弘始四年(四〇二)鳩摩羅什の譯したる佛說阿彌陀經(卷一)は、譯文の精練と意義の明瞭との爲に最も多く依用せられて、これを淨土の三部經と稱す。この淨土の三部經を通申概説せるものは世親菩薩の淨土論にして、北魏の永安二年(五二九)菩提流支これを譯出し、曇鸞これを受けてより、印度正統の淨土教は漸く支那に勃興するに至れり。

往生論註

曇鸞は前にも述べたるが如く、淨土論を釋して往生論註(卷二)を著

安樂集

し、専ら念佛の教を弘めたる人なりしが、その寂後、涅槃宗の碩學に道綽禪師あり、隋の煬帝大業五年（六〇九）石壁の玄忠寺に詣て、曇鸞の遺風を追慕し、涅槃の廣業を棄て、淨土の一門に歸し、爾來觀無量壽經を講ずること二百回、安樂集<sup>卷三</sup>を著して一代佛教に聖道淨土の二門を分別し、末代に在りては淨土の一門のみ通入すべき道なることを説きて、當時盛なりし攝論宗所説の別時意趣等の説に破斥を加へたり。而して曇鸞、道綽に唱道せられたる淨土教は唐代の善導に至りて始めて大成せり。

(八) 禪宗

教外別傳の禪法

禪宗は梁の普通元年（五二〇）菩提達磨來りてこれを傳へたることは前に述べたるが如し、これより先、東晉時代に羅什及び佛陀跋陀羅の傳へたる禪法あれども未だ世に行はれず、達磨來るに及びて純然たる以心傳心教外別傳の禪法は大に興りたり。

二祖斷臂

達磨、嵩山小林寺に在りて終日面壁默坐せるに、洛陽の高僧神光來りて法を求む、達磨は初より黙して與に語らず、一夕雪大に降りて神光の膝を没す、達磨猶この微勞小功を以ては、大法を求むるに足らずとなす、神光直ちに刃を以てその左臂を斷ちて達磨の前に置き、その決意を示したり、こゝに於て達磨は始めて法を授けたり、これ二祖斷臂と傳ふるところのものにして、神光は即ち二祖慧可禪師なり。

依鉢の相傳

慧可の外、法を達磨に得たるものに道副、尼總持、道育の三人ありしが、達磨はこれ等に對して、道副は吾が皮を得たり、尼總持は吾が肉を得たり、道育は吾が骨を得たりといひ、獨り慧可には汝吾が髓を得たりと許したりとぞ、二祖慧可は相傳の禪法を僧璨に傳へ、僧璨は道信に傳へたり、道信の下に弘仁、法融あり、その門下に至りて禪風は大に振へり。

(九) 攝論宗

攝大乘論の傳譯

攝論宗は無着菩薩の『攝大乘論』を所依とす。攝大乘論は北魏普泰元年(五三二) 佛陀扇多、既にこれを譯したれども未だ廣く行はれず、陳の天嘉四年(五六三) 眞諦三藏は『攝大乘論』<sup>(卷三)</sup>及びその釋論を譯してより始めて攝論宗として弘布せられたり。唐の世、玄奘は『攝大乘論本』<sup>(卷三)</sup>を譯し、その研究は一時甚だ盛なりしが、玄奘新に法相宗を傳ふるに及び、これに併吞せられて、攝論宗の名も亦絶えたり。

第三章 支那佛教大成時代……隋、唐

第一節 隋朝佛教の教運 (西紀五八一—六一八)

隋の文帝は北周の宣帝に代りて即位し、陳を滅して、南北を合一したれば、これより隋朝の教運は大に盛となりたり。

文帝の崇佛

文帝佛教を信ずること篤く、開皇三年(五八三) 天下に勅して、周武の法難に廢滅したる寺院を盡く再興せしめて、佛教の興隆を圖れり、帝の在位中僧尼を度すること三十萬人、寺塔を起すこと五千餘、經論を書寫すること四十六藏十三萬二千餘卷の多きに達したりといふ。

煬帝の崇佛

斯くて佛教は漸く復興せしが、文帝に次げる煬帝も或は千僧會を設けて自ら菩薩戒を受け、或は勅を發して千僧を度するなど、佛教尊崇の念深かりしかば、天台の智顛、三論の嘉祥を始めとして、英傑輩出し、隋より唐朝を通じて佛教は正に黄金時代を現出したり。

支那佛教大成時代

蓋し南北朝時代は輸入佛教の傳播時代なりしが、隋唐時代に至りて支那佛教大成時代となり、舊來の九宗は或は衰亡し或は併合せられ或は大成せられて、天台、三論、淨土、禪、法相、俱舍、華嚴、律、祕密等の九宗、殆ど外來僧の手を離れて新興し、完全なる宗旨の形態を備

ふるに至れり、今南北朝時代の諸宗と、隋唐時代の諸宗とを比較すれば大凡次の如し、

南北朝の九宗		隋唐の九宗	
毘曇宗 (僧伽提婆)	………	………	衰亡
成實宗 (鳩摩羅什)	………	………	衰亡
三論宗 (鳩摩羅什)	………	三論宗 (吉藏)	………
涅槃宗 (曇無讖)	………	天台宗 (智顛)	………
律宗 (惠光)	………	律宗 (道宣)	………
地論宗 (惠光)	………	華嚴宗 (賢首)	………
淨土教 (曇鸞)	………	淨土教 (善導)	………
攝論宗 (眞諦)	………	法相宗 (玄奘)	………
禪宗 (菩提達磨)	………	禪宗 (慧能)	………
		俱舍宗 (玄奘)	………
		秘密宗 (不空)	………
			新興

### 第三節 隋代の諸宗

#### 第一項 三論宗の大成

南地三論の教系

嘉祥寺吉藏

羅什の傳へたる三論宗は、その門弟によりて南北の地に傳播し、北地の三論は後に『智度論』を加へて四論宗となりしが、その教系は詳なる能はず。南地の三論は道生より曇濟、道朗、僧詮、法朗、吉藏と次第に傳りたることは前に述べたるが如し、而して三論宗の組織を大成したるものは、嘉祥寺吉藏なり。吉藏は梁の太清三年(五四九)金陵に生れ、七歳にして出家し、法朗に就きて三論を學びしが、三十歳するとき師の法朗寂したれば、陳末の亂を避けて東南の越州に赴き、嘉祥寺に住して三論を講じ、學徒の教養に努めたり。

隋の世となり、文帝、煬帝の歸依を蒙ること厚く、煬帝の召に應じ

二藏三輪

て揚州の慧日道場に住し、次で長安の日嚴道場に移りて、盛に三論の八不中道の妙理を宣揚せしが、三論宗はこの間に於て大成せられたり。羅什は一音教を立つるのみなりしが、嘉祥は二藏（聲聞藏、菩薩藏）三輪（根本法輪、始末法輪、攝末歸本法輪）の判教を立て、一宗の組織を完成せり。

嘉祥の著書

隋亡び唐となれるに、高祖亦大に嘉祥を優遇し、命じて十大徳の一に加へ法務を統理せしめしが、武徳六年（六二三）七十五歳にて寂したり。一代の著書四十四部ありと稱せられ、中論疏、百論疏、十二門論疏、三論玄義等は殊に有名なり。門下には慧灌、慧朗を始め多くの秀才ありて三論の宣揚に努めたり。三論宗の隆盛を極めたるは嘉祥を中心としたるその前後にして、唐の貞觀以後は玄奘の法相宗に壓倒せられ、却つて朝鮮日本に傳りて盛なるに至れり。

第二一項 天台宗の開立

惠文禪師

『法華經』を正所依とする天台宗は、隋朝、智者大師の開立するところなれども、その始めは北齋の惠文禪師に出でたり、惠文の傳は詳ならずれども、龍樹の『大智度論』によりて一心三觀の妙理を獨悟しこれを惠思禪師に授けたり。惠思は南地光州の大蘇山に赴き、更に南岳に入りて専ら所承の法門を弘め、これを智者大師に授くるに及びて天台宗は大成せられたり。

惠思禪師

智者大師

智者大師は名を智顛と云ひ、梁の大同四年（五三八）荊州の華容に生れ、十八歳にして出家し、二十三歳の時光州大蘇山に登り、慧思の法華を講ずるを聽きてその弟子となれり。幾もなくして法華三昧を證得し、陳の大建七年（五七六）會稽の天台山に隱棲し、専ら法華一乘の妙諦を宣説し、五時（華嚴、阿含、方等、般若、法華涅槃）八教（頓、漸、秘密、不）の判教を立て、一代佛教を判釋し、以て天台の一宗を開立したり。

五時八教

三大部の講説

その後陳の禎明元年（五八七）には、光宅寺に於て『法華經』を講じて

『法華文句』を著し、又隋の開皇十三年（五九三）には荊州玉泉寺に在りて『法華玄義』を説き、翌年また『摩訶止觀』を説き、開皇十七年（五九七）六十歳にして天台山に入寂したり。

その著すところ『法華玄義』『法華文句』『摩訶止觀』は天台三大部と稱せられ天台宗の根本聖教なり。この他、『觀音玄義』『觀音義疏』『觀無量壽經疏』『金光明玄義』『金光明文句』は天台五小部と稱せられ有名なり。智者大師の門下に最も著はれたるは章安大師灌頂にして、阿難の釋尊に於けるが如く、常にその左右に侍して師の講説を筆録し、三大五小部、皆章安の筆録によりて後世に傳れり。章安の寂後、百餘年間は、智威、慧威、玄朗と次第せしも、新興の諸宗に妨げられて振はず、第六祖荆溪尊者堪然に至つて再び復興したり。

荆溪は二十八歳にして玄朗の門に入りしが、章安以來天台の振はざるを慨し、『法華玄義釋籤』『法華文句記』『止觀輔行』を著して祖書を

天台五小部

章安の功績

荆溪の中興

註釋し、又『金鉉論』『止觀義例』等を著して教觀二門の宣揚に努め、唐の徳宗建中二年（七八二）八十二歳にして寂せり。

荆溪滅して天台の宗風復衰へしが、荆溪の法嗣に道邃、行滿あり日本天台の祖、傳教大師最澄は入唐して教を二師に受けたり、道邃の後、廣修、物外、元琇、清竦を経て義寂に至りしが、この時既に唐末會昌の法難に遇ひて典籍多く散逸し、且つ五代の亂世に會し、加ふるに山外異義の唱道ありて、宋初、四明智禮の三たびの天台宗復興に至るまで凡そ二百年間は、實に天台宗の暗黒時代をなせり。

### 第三節 唐朝佛教の大勢 （西紀六一八—九〇七）

隋の煬帝は性豪奢にして盛に土木を興し、國民はその苦役に惱みしが、高麗の征伐に再三の失敗を重ねて以來、國內は再び亂れたり。この時李淵はその子李世民と共に兵を擧げて、遂に天下を一

荆溪以後の天台宗

唐の高祖



釋道二教の論争

統し帝位に即きたり、之を唐の高祖となす。高祖位に即くや文教漸く起り、佛教に對する崇重も亦著しかりしが、太史令傳奕なる者あり、竊に道教を奉じ破佛の上奏をなすこと前後七回に及びしかば、法琳は『破邪論』を惠乘は『辨正論』を著してその妄を辨じたり、されど釋道二教の論争はこれより唐朝を通じて盛に行はれたり。

太宗時代の佛教

太宗(代三)の貞觀の治となるや、國內平安にして制度完備し、四夷を征して國威を外に揚げたれば、東西の交通盛なるに従ひて、當時中央亞細亞に盛なりし、祆教、摩尼教、景教、回教等の新宗教は相前後して傳りたり、佛教界はこれ等の新宗教に刺撃せられて益々多事となりしが、この間に在りて杜順は始めて華嚴宗を唱へ、善導は道綽に次で淨土教を大成し、玄奘は遠く印度に求法して譯經に従ひ、道宣は律宗を大成する等のことありて、佛教は新生命を開きたり。

則天武后時代の佛教

太宗の後、高宗(代三)より、中宗(代四)睿宗(代五)を経て、則天武后政權を握るや大に佛教を保護し、印度より實叉難陀を招きて菩提流志と共に八十華嚴を譯せしめ、法藏をして宮中に事々無碍の妙義を説かしめたり、而して法藏は華嚴宗を大成し、義淨は海路より印度に求法し、惠能、神秀は盛に禪宗を弘興して、佛教は正に全盛の頂點に達したり。

玄宗時代の佛教

玄宗(代六)即位するに及び、慈愍三藏は西天より歸りて淨土教を弘め、善無畏、金剛智、不空の三大士は始めて祕密教を弘傳するありしが、次で肅宗(代七)代宗(代八)德宗(代九)の間には湛然出て、天台宗を復興し、清涼は華嚴宗を弘興し、宗密は教禪一致の説をなすありて、佛教は愈々盛に行はれたり。

斯の如く諸帝の崇佛と共に、碩德輩出し、支那佛教の黄金時代を現出せしが、武宗(代一五)の時に至りて會昌の法難となり、佛教は一大

會昌の法難

打撃を被れり。

武宗、道士趙歸眞に師事して道教を尊信し、動もすれば破佛の舉に出でんとせしが、遂に道士鄧元超、劉元靖の奏請により、會昌五年（八四五）勅を下して四千六百の佛寺を破壊し、二十六萬餘の僧尼を還俗せしめしかば、佛教の典籍は此時多く散失せり、これを會昌の法難とも又第三武の厄難ともいふ。

唐室の衰運  
と佛教

會昌六年武宗崩じて宣宗（代一六）即位し、趙歸眞等を退けて佛教復興の勅を下せり、懿宗（代一七）は崇佛の念極めて深かりしかど、時既に唐末に及びて佛教の復興昔日の如くならず、最後の景宗（代二〇）は朱全忠に亡ぼされて五代の亂世となり、佛教も亦自ら衰運に向へり。

#### 第四節 唐代の諸宗

##### 第一項 淨土教の大成

善導の出世

曇鸞、道綽の後を承て淨土教を大成したるは善導大師なること前に述べたるが如し。善導は隋の煬帝大業九年（六一三）泗州（或は臨淄）に生れ、初め明勝に就きて三論を學び、兼ねて『法華經』『維摩經』等をも修めたりしが、自ら惟らく、八萬四千の教法を學ぶとも機根に相應せずは所詮なしと、經藏に入りて有縁の經を求めしに、『觀無量壽經』を得たれば、大に喜びてこの經を讀誦し、さらに唐の太宗貞觀十五年（六四二）道綽禪師に謁して其弟子となり、遂に淨土教を大成したり。

善導の自行  
化他

爾來善導は三十餘年の間、或は長安の光明寺に住し、或は終南山悟眞寺に在りて道俗を教化し、日々念佛を稱ふること十萬聲の多きに達し、その生涯中に於て『阿彌陀經』を寫すこと十萬卷、淨土の曼荼羅を畫くこと三百餘壁に及びて自行化他怠らざりしが、唐の高宗永隆二年（六八二）六十九歳にして寂せり。

善導の著書

著書に『往生禮讚』、『法事讚』、『觀念法門』、『般舟讚』等あり、その『觀無量壽經疏』四卷は、淨土教に在りては最も重要なるものにして、古來これを『四帖疏』と稱して有名なり。

善導滅後の淨土教

善導の門下には懷感禪師あり、懷感は初め長安千福寺に住して法相宗を學びしが、善導の德化を慕ひて弟子となり、『釋淨土群疑論』を著したり、其他律宗の貞固律師、及び隆闡大師等ありしが、當時は新興の諸宗に壓倒せられて、廣く傳らざりき。善導の滅後八十餘年を経て後善導と稱せられたる法照、小康の二師出でたり、法照は唐の代宗(代八)の頃に出で、『五會法事讚』を著し、小康は德宗(代八)の貞元年中、善導の化を追慕して専ら淨業を修し、『淨土瑞應刪傳』を著したり、善導流の淨土教はこれを最後として、支那に消息を絶ちて日本に傳り、善導滅後四百九十五年、法然上人の淨土宗開立を見たり。善導に後るゝこと凡そ四十年にして印度より還り、一流の淨土

慈愍流の念佛

教を宣べたるものは慈愍三藏なり。

慧日の入竺

慈愍は名を慧日といひ、義淨の印度を巡遊して還るや、深くこれを羨慕してその弟子となり、中宗の嗣聖十九年(七〇二)意を決して海路より印度に入り、聖跡を巡拜して梵本を求め、智識を訪ふこと十餘年、大に得るところありしが、陸路より歸朝せんとして具に辛苦を嘗め、こゝに厭世求法の念を強くして出離の要道を求めしに、天竺の碩德は教ふるに阿彌陀佛の西方往生を以てしたり。斯くて北印度健駄羅國の山中に於て觀音に祈り、西方願生の靈告を蒙りて勇氣百倍し、葱嶺の險を越えて途を急ぎ、前後十八年を費して玄宗の開元七年(七一九)長安に歸れり。

厭世求法

慧日の歸朝

慧日は携へ歸れる佛像梵經を朝廷に獻じたれば、玄宗は大にこれを嘉して慈愍三藏の號を賜ひたり。爾來長安の罔極寺に在りて専ら念佛を修し、玄宗の天寶七年(七四八)六十九歳にして示寂せ

り。これ慈愍流の念佛にして支那浄土教三流の一なれども、其教義を審みせず、又後繼者を有せざりしが爲、早くその傳を失ひたり。

### 第二項 禪宗の大成

法脈の分派  
達磨大師直傳の禪宗は、二祖慧可より僧璨を経て道信に傳へられたることは前にいへるが如し、道信の下に弘忍、法融の二人あり、弘忍は衣法を繼ぎて五祖となりしが、法融は金陵の牛頭山に住し別に法幢を翻して牛頭禪の祖となりたり、これ禪宗に法脈を分てるの始めとなす。

惠能と神秀  
五祖弘忍の下に惠能、神秀の二上足あり、惠能は初め盧行者ろかぎやと呼ばれて勞役に服し、門下素より彼に重きを置くものなかりしが、神秀は衆中の首として參徒みな推重し、五祖の衣鉢を嗣ぐものとして擬せられたり。然るに五祖弘忍は、嗣法のもの定めんと欲し

南頓北漸

て、一日參徒に命じて各々一偈を述べその所悟を呈せしめたり。その時惠能の答へたる偈はその識見遙かに神秀の上に出でしかば、弘忍は密に惠能を招きて衣鉢を授け、且危害の惠能に及ばんことを恐れて南方に去らしめたり。これ南北二派の別を生じたる始めにして、神秀の系統を北宗禪といひ、惠能の系統を南宗禪といひ、又これを並稱して南頓北漸と稱す。

北宗禪と南宗禪

北禪の神秀は則天武后の歸向を受け、その一流の禪は久しく北方に盛なりしかども、唐の中世以後には漸く衰へたり。而して後世最も榮えたるは南禪なり、南方に去りたる六祖惠能は、民間に隠れてその名を著さざること十五年なりしが、三十九歳にして始めて出家し、韶州曹溪山寶林寺に住して盛に所承の禪法を弘め、遂に禪宗を大成せり、玄宗(代六)の開元元年(七一三)七十六歳にして入寂す唐の憲宗(代一)は大鑑禪師と諡號を賜ひたり。

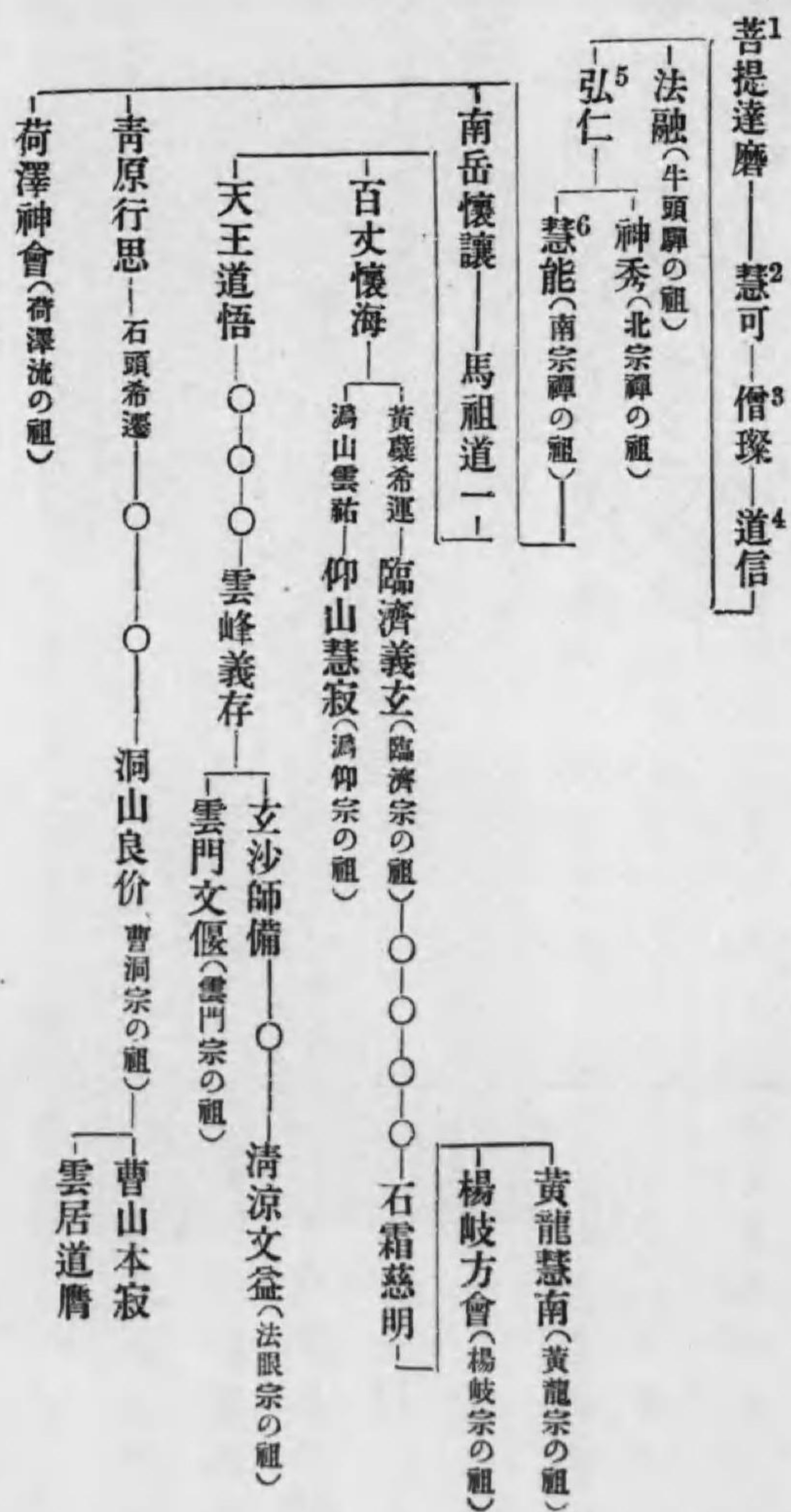
惠能の門下

六祖惠能の門下特に著名なるは懷讓、行思、神會の三禪師なり、懷讓は南岳の般若寺に居りたれば、南岳禪師と呼び、行思は吉州青原山の靜居寺に居りたれば、又青原禪師と呼べり。この二人は兩々相對峙して支那禪宗の偉觀をなし、南岳は即ち臨濟系統の祖にして、青原は曹洞系統の祖となりたり。而して神會は六祖に給侍すること多年、その心要を傳へて長安に至り、當時盛なりし北禪の中に在りて、大に南禪を宣揚し、遂に北禪を壓倒したり、荷澤寺に住せしかば、又荷澤と稱し、その禪法を荷澤流と呼びたりしが、幾もなくしてその法系は絶えたり。

五家の門流

斯の如く六祖惠能の寂後、南禪の宗風は愈々盛にして門葉漸く繁く、唐末會昌の法難ありしかども、獨り禪宗のみはその影響を受くること少なく、五代の末に至るまで凡そ二百五十年間に於て、所謂五家各々その門戸を分つに至れり。今その法系を掲ぐれば次の如し。

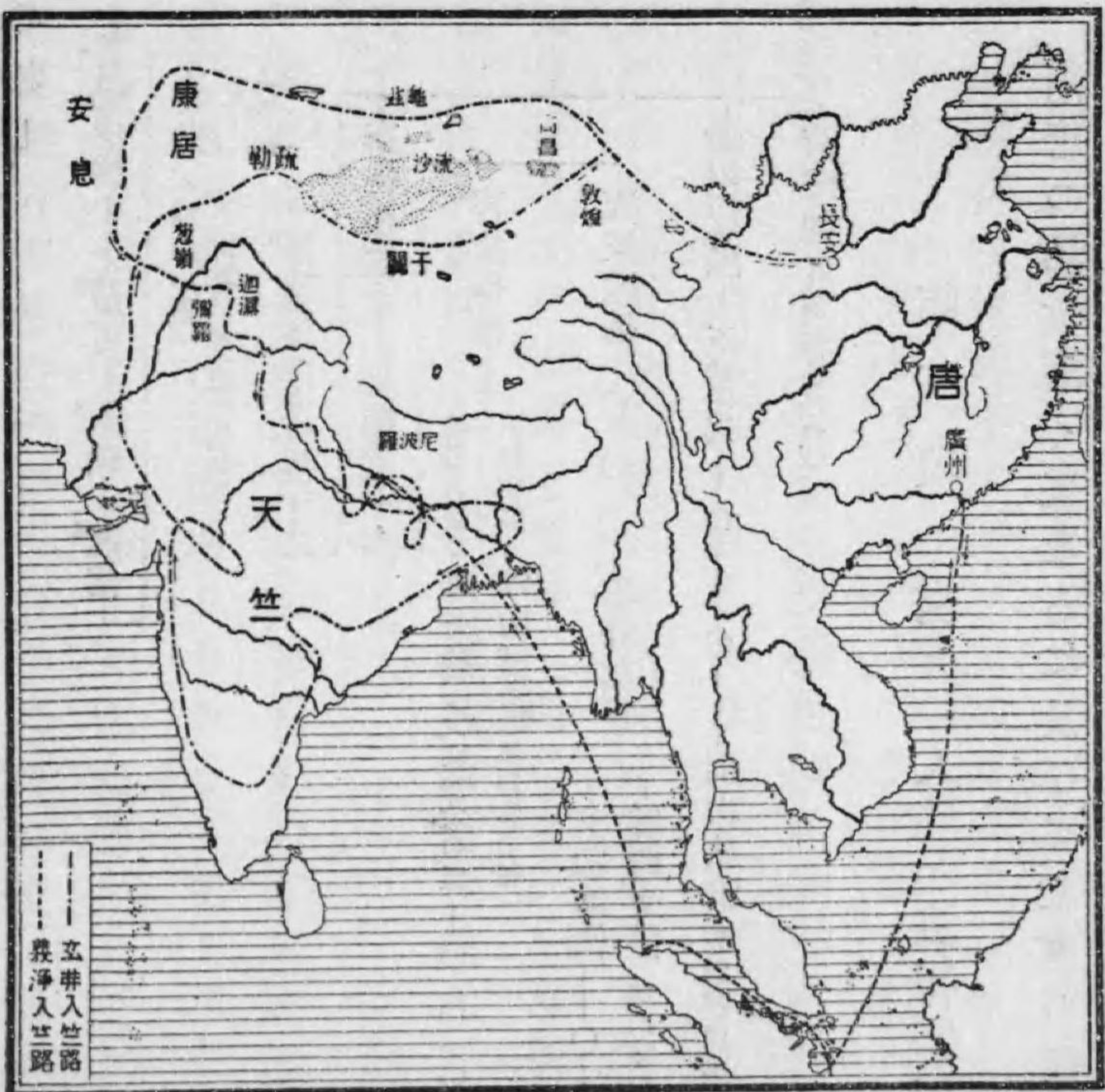
の如し。



第三項 玄奘の入竺と法相俱舍宗の傳來

隋唐の佛教漸く盛なるに及びて、在來の翻譯のみにては満足す

玄奘の入竺



玄 非 義 淨 入 竺 圖

ること能はず、進んで入竺求法するもの亦多きを加へたり。玄奘、慈愍、義淨、慧超等はその最なるものなりしが、特に玄奘を以てその第一人者となす。玄奘は隋の開皇二十年（六〇〇）に洛陽に生れ年少の頃より四方

玄奘の行路

の碩徳を歴訪して教を受けしが、前代の譯經中には往々にして誤謬あることを發見し、法顯の芳躅を偲んで、唐の貞觀三年（六二九）單身入竺を志して長安を發したり。

往路に龜茲、康居等の諸國を経て北天竺に達し、先、迦濕彌羅に在



玄 非 三 藏

て『俱舍』、『因明』、『大毘婆娑論』等の諸部を研究し、進んで中天竺に入り那

蘭陀寺の戒賢論師に師事して瑜伽唯識の法門を研鑽し、更に諸國を歴遊して梵本を求め、經論五百二十爽六百五十五部を巨象に載せ、再び疏勒、于闐等の陸路を辿りて唐の太宗貞觀十九年（六四五）前

太宗高宗の  
歡待

後十七年の歲月を費して長安に還れり。  
太宗は玄奘を歡待すること極めて厚く、勅して長安の弘福寺に  
迎へて譯經に従事せしめ、高宗も亦厚く尊崇して大慈恩寺を建て、  
別に譯經院を設けて譯場に充てしめたり。

玄奘の譯經

斯くて高祖の麟德元年（六六四）、六十五歳入寂に至るまで凡そ二  
十年間、専ら譯經に従事し、『解深密經』、『瑜珈論』、『顯揚論』、『成唯識論』  
『攝大乘論』、『俱舍論』、『發智論』等、總じて七十五部一千三百三十五卷  
を譯出し、譯經史上に一新時期を劃したり。蓋し從來の翻譯は達  
意的にして動もすれば字義を顧みざるの弊ありしかば、玄奘は直  
譯的にその義理を闡明せり、古來玄奘以前の羅什眞諦等の翻譯を  
舊譯といひ、玄奘以後の翻譯を新譯と稱す。

新譯と舊譯

西域記

玄奘は多くの經論を譯出すると共に、入竺中の見聞を記述して  
西域記を著し、法顯の佛國記と共に有名なりしが、殊に新しく唯識

法相俱舍二  
宗の傳譯

法相宗を傳へ、又俱舍宗をも傳へたれば、法相、俱舍の二宗は新興の  
宗派として、盛にその門弟によりて宣揚せられたり。

法相宗の大  
成

玄奘の門下三千と稱せらるゝ中、窺基、普光、法實、神泰等はその主  
たり。窺基は即ち慈恩大師にして、玄奘に唯識法相の奥義を受け  
てより、百本の疏を作りて盛に師説を解説せり、『成唯識論述記』、『成  
唯識論樞要』、『大乘法苑義林章』等はその著書の中にて最も有名に  
して、支那の法相宗はこゝに至りて、全く整然たる組織を以て大成  
せられたり。

唯識三箇の  
疏

窺基の弟子に慧沼ありて、『成唯識論了義燈』を著せり、慧沼の弟子  
に智周あり、『成唯識論演秘鈔』を著して盛に法相の宗義を説けり、『了  
義燈』、『演秘鈔』は、窺基の『樞要』と共に三箇の疏と稱して有名なり。  
智周の後には如理、道邑等ありしが、開元以後唐末に及びては法相  
宗の勢力見るべきものなく、却つて我が國に傳りて發展せり。

俱舍宗  
俱舍の三大家

玄奘門下にして特に玄奘より俱舍を傳へたるものを普光、法實、神泰の三人とす、普光には『俱舍論義疏』即ち『光記』と稱するものあり、法實神泰には各々『俱舍論疏』の著ありて、世に俱舍の三大家と稱せられたり、俱舍宗はその後法相宗の附宗となりて盛ならず、法相宗の我が國に傳來するに及びても依然その附宗として行はれたり。

#### 第四項 華嚴宗の開立

華嚴宗の淵源  
杜順  
智儼  
法藏

華嚴宗は華嚴經に依つて立教開宗せるものにして、東晋の覺賢始めて六十華嚴を譯してより、地論宗の慧光は獨特の判教を立て、華嚴經を最上圓頓の教となし、隋末唐初に至りては杜順即ち帝心尊者あり、『五教止觀』、『法界觀』を著して華嚴宗の端緒を開き、その弟子智儼即ち至相大師は、『華嚴經搜玄記』、『孔目章』等を著して師説を繼承敷衍し、これを弟子法藏に傳へたり、法藏は即ち賢首大師に

賢首の大成

して五教十宗の判教によりて、華嚴宗はこゝに大成せられたり。

八十華嚴の翻譯  
賢首の著書

賢首は太宗の貞觀十七年（六四三）長安に生れ、睿宗の先天元年（七一〇）七十歳にして入寂したるが、その初めは智儼に就きて華嚴を聽き、後に玄奘の譯場に列なりしが、見解を異にするところありて、ここを去りたり。時に實叉難陀は華嚴の梵本を携へて于闐より來りしかば、賢首はその譯場に入り、聖曆二年（六九九）に至りて『八十華嚴』を譯成せり。譯成るや則天武后の命を受けて長生殿に『八十華嚴』を講じ、殿隅の金獅子を指して譬となして、十玄緣起の妙理を進講したれば武后は容易にその理を領解したりといふ、この時の講説を筆録せるものは『金獅子章』にして、その他多くの著書ありしが、『華嚴經探玄記』、『五教章』、『起信論義記』は最も有名なりとす。

賢首の門下

賢首の門下、妙からざりしが、事蹟詳ならず、唯、惠苑はその上足として名をなし、『華嚴刊定記』を著したれども、所論頗る師説と異なるも



清涼

四十華嚴の  
翻譯

宗密

のありて、古來賢首門下の異議とせられたり。

賢首の滅後凡そ一百年にして清涼大師澄觀あり、大に賢首の教を弘めて華嚴宗を再興せり。清涼は幼にして出家し、碩學を歴訪して、律、禪、三論、天台等の諸宗を學び深くその奧義に達せしが、後に錢塘天竺寺の法洗に師事し華嚴の宗要を學びてより、五臺山清涼寺に住し、盛に華嚴を講じ、『八十華嚴大疏』を著せり。偶、般若三藏來りて『華嚴經入法界品』を譯するや、命を受けてその譯場に參與せり世に『四十華嚴』と稱するものこれなり。かくて清涼は、惠苑の異議を排して賢首に復歸し、文帝の開成三年（八三八）百有二歳の高齡を以て入寂したり。

清涼の弟子に宗密禪師圭峰あり、初め禪宗を學びしが、後、清涼に師事して華嚴宗を修め、教禪一致の説をなしてこれを弘通せしが武宗の會昌元年（八四二）六十二歳にして寂したり、その著書『原人論』

華嚴の列祖

四分律宗の  
三派

は最も有名なるものにして、今猶世に行はる。

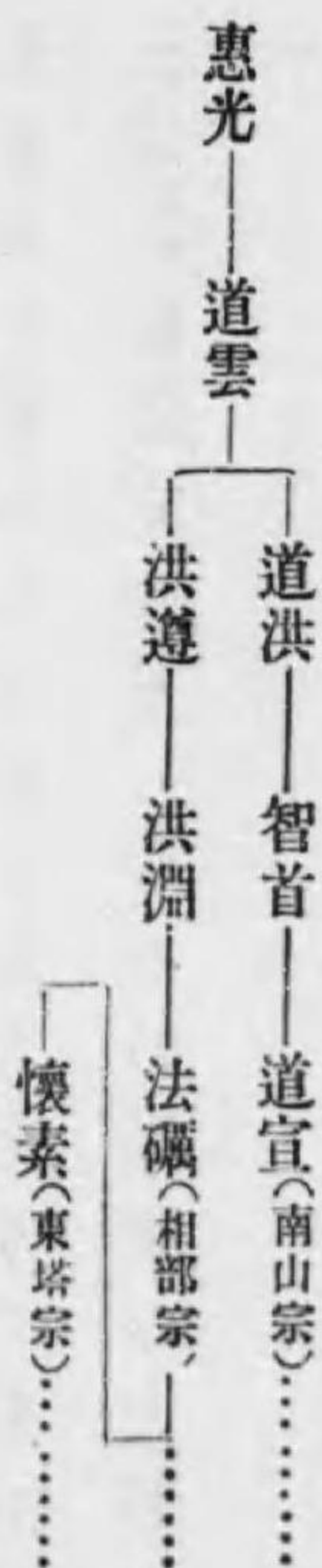
斯の如く華嚴宗は杜順を第一祖として二祖智儼より三祖賢首に至りて大成せられ、四祖清涼五祖宗密と傳承せられたれども、宗密以後は他の諸宗と等しく會昌の法難に遇ひて衰退せり。

### 第五項 律宗の大成及び義淨の入竺

北魏の末頃より漸次興起したる四分律宗は、慧光に依つて盛運に向ひたることは前に述べたるが如し、慧光の弟子に道雲あり、道雲の下に洪遵道洪ありしが、洪遵より洪淵を経て法礪は相部宗を開き、法礪の法孫には懷素ありて東塔宗を開きたり。道洪の系統には智首あり、智首の下には道宣ありて南山宗を開き、こゝに四分律の三宗派は鼎立せり。今その系統の大要を示せば次の如し。

三派の消長

斯の如く四分律宗は、立教講學の立場を異にして三派の分立ありしが、相部宗の祖、法礪律師は『四分律疏』を著して一派をなし、東塔宗の祖、懷素は、法礪に従ふこと三年、その説に服せざるところあり『開宗記』を著して一派をなし、互に論争せしが、幾くもなくして兩宗ともにその消息を絶ち、後世に最も榮えたるは道宣の南山宗のみとなれり。



道宣の律宗大成

道宣律師は隋の開皇十六年(五九六)長安に生れ、智首律師に従ひて具足戒を受け、専ら戒律を學び、唐の太宗貞觀十九年(六四五)玄奘の譯場に列して筆受の上首となりたり、されば道宣の教義は法相大乘の義を以て四分律を解し遂に律宗を大成したるものなり。

南山の五大部

道宣の著書は二百餘卷の多きに上り、就中『行事鈔』、『戒疏』、『羯磨疏』、『拾毘尼義鈔』、『比丘尼鈔』は、南山の五大部と稱して特に有名なり。道宣はたゞに四分律に通曉したるのみならず、又歴史にも明かにして『大唐内典錄』、『續高僧傳』、『廣弘明集』の著作は、支那佛教史の研究には缺ぐべからざるものとして知らる。

道宣寂後の律宗

唐の高宗乾封二年(六六七)壽七十歳にして道宣は寂したりしが門下甚だ多く、周秀、弘景、大慈等は最も名あり、周秀はその法燈を繼ぎて滴々後世に傳へ、弘景の弟子鑑眞は遠く我が國に渡りて初めて律宗を傳へたり。

義淨の入竺

四分律宗の大成ありて後、又、義淨三藏によりて有部律の傳譯を見たり、義淨は幼にして出家し、十五歳にして早くも法顯、玄奘の芳跡を慕ひて西遊の志ありしが、唐の高宗咸亨二年(六七二)三十七歳にして海路より印度に向ひたり。

義淨の譯經

印度に達するや、先づ佛蹟を巡拜して多くの梵本を求め、留ると二十五年にして再び海路を辿り、則天武后の聖曆元年（六九八）四百餘部の經律論を携へて長安に還れり。その時武后は親しく百官を従へ、歌樂を奏してこれを迎へたりといふ。

その後、洛陽の大福先寺、長安の西明寺、或は薦福寺の譯經院等に在りて、將來の梵本六十餘部二百三十餘卷を譯出し、玄宗の先天二年（七一二）七十九歳にして寂せり。譯するところの經論の主なるは、『金光明最勝王經』、『能斷金剛般若經』、『佛頂尊勝陀羅尼經』等の大乘に屬するものなりしが、律は盡く有部律に關するものゝみにして、『根本說一切有部毘奈耶』以下十餘部百六十餘卷に及びたりといふ。その他義淨の著の有名なるは、『南海寄歸傳』にして、法顯の『佛國記』、玄奘の『西域記』と共に、印度史研究上に缺ぐべからざる寶書として學者の尊重するところたり。

有部律の傳譯

### 第六項 秘密教の傳來

密教の三部經

秘密教は『大日經』、『金剛頂經』、『蘇悉地經』の三部經に依る宗派にしてその源は遠く龍樹菩薩に發し龍智菩薩を経て、善無畏、金剛智等の三藏によりて支那に傳へられたり。

善無畏の來朝

善無畏は中天竺の人、龍智に秘密教を受けたる後、唐の玄宗開元四年（七一六）葱嶺の險を越えて長安に來れり。玄宗は迎へて西明寺に居らしめ、優遇至らざるなし、幾もなくして彼は華言に通じ、『大日經』、『蘇悉地經』を始めとして十有餘部の經典を翻譯し、盛に密教を弘通したり。その晩年には屢々西域に還らんとしたれども、帝は堅く留めて許さず、終に開元二十三年（七三五）九十九歳にして入寂せり。

一行

善無畏の弟子には一行、玄超、義林等ありてその法を嗣げり、一行

金剛智の來朝

は『大日經』を註釋して『大日經疏』を著して名高く、義林の弟子順曉は日本最澄の師として世に知られたり。

善無畏の來朝に後るゝこと四年にして、金剛智は弟子不空と共に海路支那に來れり。金剛智は南天竺の人にして、龍智傳法の後支那に來り、大慈恩寺に住して密教を弘め、善無畏が胎藏界曼荼羅を傳へたるに對して、金剛界曼荼羅を弘め、到るところに壇を築きて灌頂の道場となし、一行等亦來りて灌頂を受け、密教の弘通盛なりしが、開元十九年（七四二）七十一歳にして寂せり。

不空

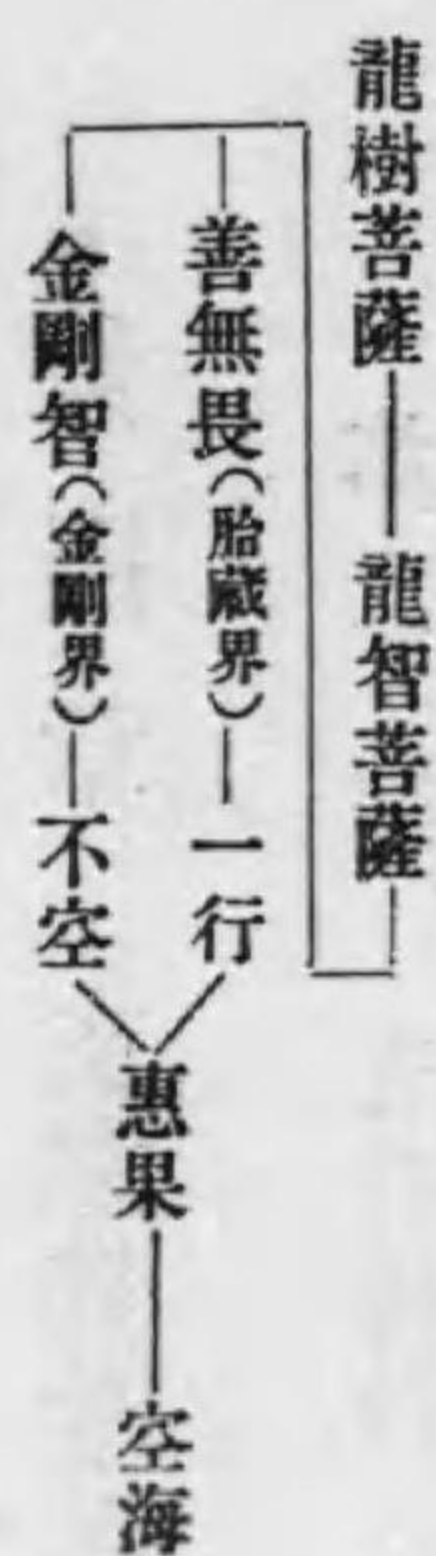
不空は南天竺の人にして、幼より金剛智の弟子となり、十六歳の時師に従うて支那に來れり。師と共に譯經し又師の弘教を助けしが、師の寂するや、遺命を受けて、弟子、含光、慧辨等を伴ひて故國に歸り、再び經籍五百部を賫して海路支那に來れり。玄宗の勅によりて淨影寺に住し、爾來翻譯に従事すること三十餘年、『金剛頂經』を始

開元の三大師

惠果

めとして經論一百餘部を譯出せしかば、古來羅什、眞諦、玄奘と共に四大翻譯家と稱せられ、實に支那密教の隆盛は不空に至りて極れり、代宗の大曆九年（七七四）七十歳にして寂せり。

善無畏、金剛智、不空は開元の三大士と稱せられて共に名聲噴々たり、不空門下には、その密灌に浴するもの甚だ多く、殊に金胎兩部を傳へて後世に大なる影響を與へたるは、青龍寺の惠果阿闍梨なりとす。惠果は日本空海受法の師なりしが、これより密教は唐末五代の難に遇ひて支那に振はず、海を越えて我が國に榮えたり。今これ等系統の大要を圖示すれば次の如し。



### 第四章 支那佛教保守時代……五代、宋

#### 第一節 五代佛教の厄難 (西紀九〇七—九六〇)

五代の紛亂

唐朝滅びて後は、僅か五十餘年間に後梁、後唐、後晋、後漢、後周の五代の紛亂となり、中央政府の威力弱く、各地の節度使は專横となり又楚、荆南、後蜀、南漢、南唐、吳越、北漢等の諸國は、各々一方に割據して攻争を事とせしかば、佛教もその影響を蒙りて益々衰運に赴けり。殊に後周の世宗は佛教を好まず、顯德二年(九五五)勅を發して、私に僧尼を度することを禁じ、又勅額なき寺院三千三百餘を廢し、更に佛像鐘磬を毀ちて周通錢を鑄造せしむる等迫害を加へたり、これ三武一宗の法難と稱する中の一宗の法難なるものなり。かくて佛教は愈々凋落し、諸宗高德の出でざるのみならず、章疏また多く

世宗の法難

散佚せり。

吳越王の保護

然れども各朝帝王中には、佛教の外護に努めたる者少からず、南方の吳越王の如きは、その最たるものなり。吳越は今の浙江地方に割據して杭州府を都とせしが、錢鏐より元瓘、弘佐を経て弘俶に至るまで代々皆信法の念篤く、寺院建立の盛なると共に高僧多く杭州に聚りたり、弘俶即ち忠懿王は最も興佛に力を盡し、天台義寂の指示によりて、散佚せる天台の教籍を高麗に求めしに、高麗王は請に應じ、『四教儀』の著者を以て有名なる諦觀法師を使として、これを獻じたれば、爲に台學復興の端をなし、將に滅せんとする佛教の命脈を辛うじて保つことを得たり。

#### 第一節 宋代佛教の復活 (西紀九六〇—一二七九)

後周の禪を受けて帝位に即き、漸次列國を征服して、天下を一統

宋太祖の一統

太祖の興佛

せるものは宋の太祖なり。太祖は文教を興隆し治世の實を擧げんとして、儒佛道三教の復興に意を用ひしかば、一時衰運に赴きたる佛教も、漸次興隆の兆あるに至れり。

太祖は建隆元年（九六〇）勅を發して、前代に廢せられたる佛寺の復舊を許し、又乾德四年（九六六）詔して行動等百五十七人を西域に遣して佛教を求めしめ、曼殊室利、可智、法見等西天の諸三藏多く來朝するや、優遇して譯經の業を盛ならしめ、且つ屢々金字銀字の藏經を書寫せしめて大に佛教の興隆に努めたり。殊に有名なるは大藏經開版の事業にして、開寶四年（九七一）張從信を成都に遣して大藏經版を印刻せしめ、太宗の大平興國八年（九八三）に至りて、五千四十八卷の大藏經版を完成せり、これ支那に於ける一切經刊行の起原にして、これより宋、元、明、清の間には十數回の開板を見たり。

大藏經の開版  
譯經院

太宗<sup>(三)</sup>の大平興國七年（九八三）には洛陽に譯經院を建設し、當時

來朝せる天息災、施護、法天等をして、盛に經典を翻譯せしめ、又譯經事業を繼續せんが爲、惟淨等十人の童子を選びて梵語を學ばしめたり。かくて眞宗<sup>(三)</sup>の代には譯出せし經論總て四百十三卷に及び、これを大藏中に編入せり。かくの如く歷代帝王の保護によりて、佛教研究の便を得たれば、講學の氣運は教界に漲りて活氣を帯び、華天禪律等の諸宗も亦漸く復活することを得たり。

徽宗の法難

然るに宋末の閻君徽宗<sup>(八)</sup>に至りて佛教は又法難を蒙りたり。

徽宗は深く道教を信じて佛教を排斥し、宣和元年（一一九）天下に勅して、佛を大覺金仙と號し、菩薩は仙人、大士、僧は德士、尼は女德士と呼び、寺院を宮觀と改め、僧尼には笏を執り道衣道冠を着せしめられたれば、佛教は全く道教化するの奇觀を呈したり。この時、沙門永道等は上書して諫めたれども、帝は却つてこれを怒り、永道を流刑に處し、惠日、明覺等を杖殺する等の暴舉に出でたり。然るに宣和七

宋朝の南渡

年に至りて帝は前非を悔い、永道を京師に召して僧の形服に復せしめ、佛教を保護して道教を禁止せり。  
然れども當時、北方に起りたる金は、南進して宋に迫りしかば、徽宗は位を欽宗(九)に譲り、勤王の兵を募りてこれに抗せしかど、金軍は遂に國都開封を陥れ、徽宗、欽宗以下皇族を捕へて北に歸れり。  
これより河北の地は全く金の領土となり、宋は江南に遷りて、欽宗の弟高宗即位し、都を臨安に奠めたり、これを南宋となす。天下の騒亂かくの如くなりしかば、佛教も亦從つて衰へたり。

### 第一項 天台宗の復興

宋代佛教興隆の氣運に乗じて、最も隆盛を極めたるは天台及び禪宗にして、律、華嚴の諸宗も亦宗勢を回復したり。

天台宗の復興

天台宗は、荆溪の中興以後は宗勢萎靡として振はず、五代亂離の

義寂門下

間に在りては天台三大部の經籍すら、この國に影を留めざるに至れり。されど吳越の忠懿王は義寂の爲に、天台の教籍を高麗に求めてより、漸く天台宗復興の氣運に向ひたり。

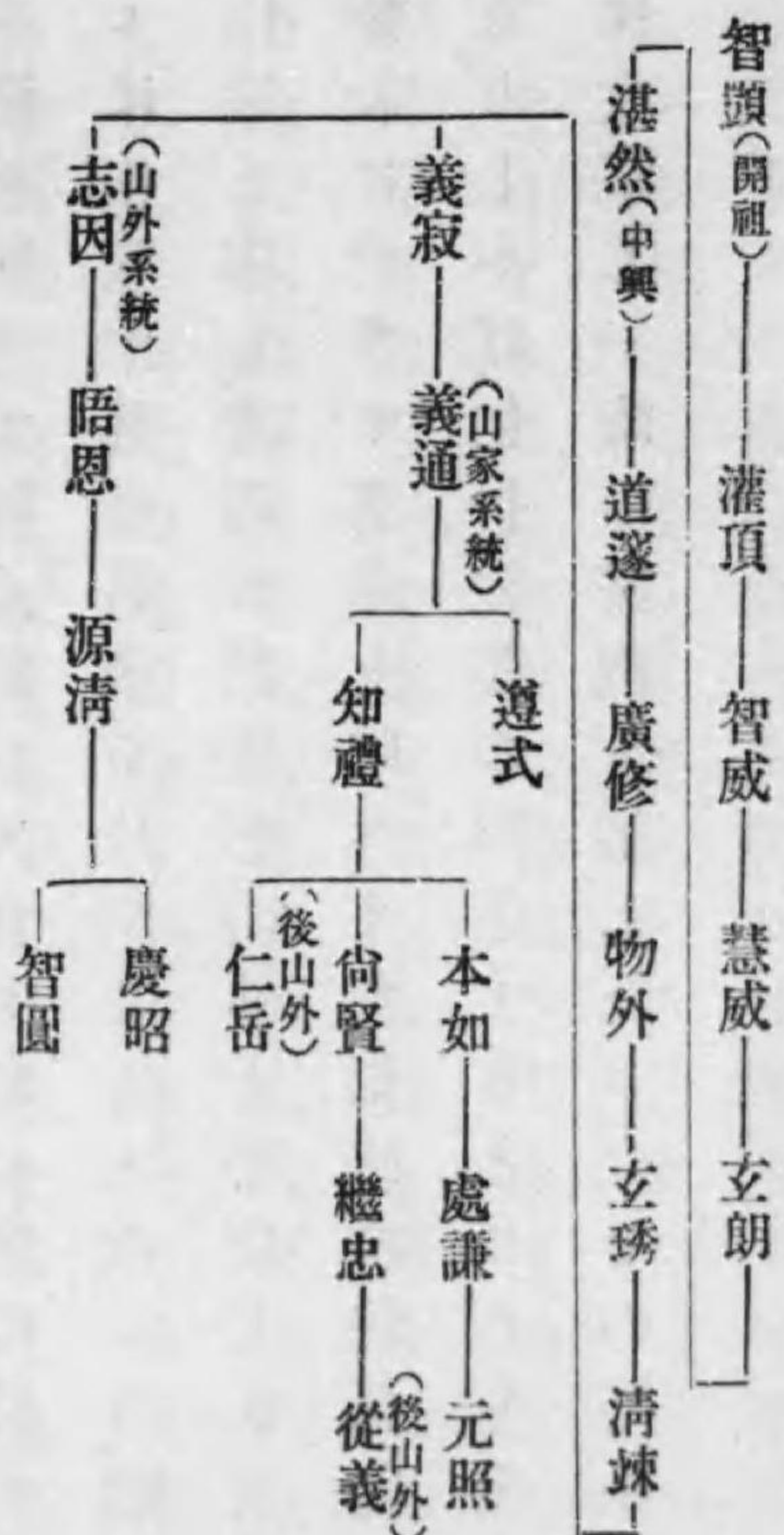
山家山外の二系統

義寂の下に義通あり、義通の下に知禮、遵式ありて大に天台正統の教觀を宣揚せんことに努めたり。然るに義寂と同門に出でたるものに志因あり、志因の弟子に晤恩あり、源清、智圓、慶昭等は、その系統を嗣ぎて、所説頗る天台大師の意に反するものありしかば、こゝに山家山外の系統を分つこととなれり、即ち義通、知禮の門流を山家と稱し、志因の門流を山外と呼びしが、更に知禮門下の仁獄は師説に背きて異義を唱へ、また知禮の法孫從義はその説山家に異なりしかば、仁岳、從義の唱道するところを後山外と稱して互に論難攻撃し一時の盛觀を呈したり。今その略系を示せば次の如し。

後山外

四明知禮

山家山外の争に於て、その中心をなしたるものは、山家の知禮及び山外の慶昭、智圓なり、知禮は太祖の建隆元年（九六〇）明州に生れ十五才の時出家し、後四明に在りて天台の教觀を宣揚すること四十餘年、時人稱して四明尊者といへり。常に筆硯に親みて祖典を註釋す、その『十不二門指要鈔』は極力山外の異議を道破し、天台の正觀を述べたるものとして有名なり。



慶昭と智圓

後山外對破

山外の源清は『十不二門示珠指』を著して、知禮の立義に反對し、弟子慶昭は智圓と共に師説を守りて知禮と論争すること七年の長きに及びたりといふ。後山外の説に對しては、知禮の法孫なる處元、了然、善月等ありて、能くこれを對破せり。かくて兩派の諍争は北宋の終りに至るまで盛に行はれしが、南宋以後に至りては漸次衰運に赴きたり。

四分律宗の復興 允堪律師

律宗にては、知禮と同時に允堪律師あり、允堪は南山律宗の著書を註して、世に十本の記主と稱せられしが、『行事鈔會正記』は最も有名にして、四分律の會正宗と稱せらる。蓋し南山律宗の傳統は道宣より、宗周、道恒、省躬、惠正、法實、元表、守言、元解、法榮、處恒、擇悟を経て、十三祖允堪に至り、允堪の下に擇其あり、擇其の弟子に元照ありて、その再興を見たり。

元照律師

元照は初め知禮の法孫なる處謙の下に在りて、天台の教觀を學



會正宗資持宗

華嚴宗の復興

びしが、後天台の教理を以て律宗を解釋して『資持記』を著したり。錢塘の靈芝寺に住し専ら四分律の復興に努めしかば、これを允堪の會正宗に對して資持宗と稱し、從來の律宗に比して一大特色を發揮し、會正、資持の二宗は共に行はれて、宋朝律宗の隆盛をなせり。元照は又『阿彌陀經疏』を著して、傍ら淨土教をも弘めしが、徽宗の政和六年（一一一六）六十九才にして入寂せり、門下の智交、准一、法政等相踵いで律宗を弘めて宋末に至れり。

華嚴宗にては智禮と同時に長水の子璿あり『大乘起信論疏筆削記』を著してその名高く、一千の學徒は常にその門に集りたりといふ。門下の淨源最も名あり、高麗の僧義天來りて諸宗を研鑽せしが、義天歸國の後、金字の華嚴經三種六十、八十、四十の三譯を以て淨源に贈りしかば、淨源は慧因寺に華嚴閣を建て、これを安置したりといふ。

### 第二項 禪宗の隆盛

禪宗は唐末より五代の間に在りて、慧能の南宗禪獨り榮え、その法脈は分れて曹洞、雲門、法眼、臨濟、僞仰の五家をなしたること前に表示せるが如し。

然るに宋初に至りて、慧寂の瀉仰宗は既にその法脈を存せず、法眼宗は、文益の下に天台山の徳韶あり、徳韶は宋太祖の國師となりしが、その門下に永明寺延壽あり、延壽は『宗鏡錄』の著者にして、禪と共に念佛を修し學徳高かりしが、久しからずして法脈斷絶せり。

曹洞宗は洞山良介の下、嗣法のもの少からざりしかど、數傳の間は法聲甚だ揚らざりしが、良介八世の法孫、芙蓉道楷に至りて宗風を宣揚したり。道楷は天寧寺に住し、性高潔にして道譽高かりしかば、徽宗は紫衣及び定照禪師の號を賜ひしに、故ありてこれを受

瀉仰宗

法眼宗

曹洞宗

雲門宗

けず、遂に不敬の故を以て還俗流配の刑を受けたりといふ。道楷より七世の法孫に天童如淨あり、如淨は又盛に曹洞の禪風を振ひたりしが、道元禪師の入宋によりてその心要は我が國に傳へられたり。

雲門宗は文偃より、澄遠、光祚を経て重顯に至り、宗風大に振へり。雪竇重顯は南宋前期の人にして光祚に師事すること五年、心印を得たる後明州の雪竇に住して禪徒を指南し、雲門宗を中興せり。選するところの『碧巖集』は有名なるものなり。

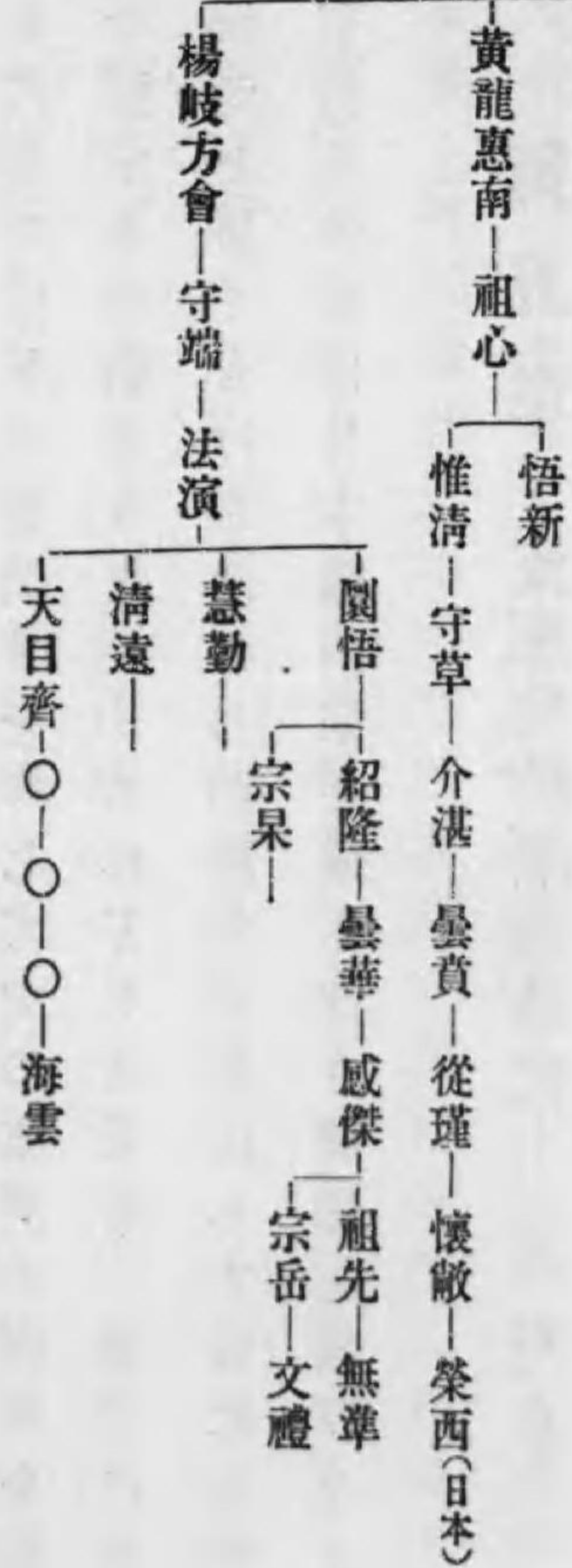
重顯の下に義懷あり、義懷の下に圓照、圓通の二人ありて最も著れ、各々その法統をつぎしが、南宋の後期に入りて又その消息を絶てり。

臨濟宗

臨濟宗は北宋南宋を通じて、宗風の旺盛なること、他の諸宗派を凌ぎ、宋初に於て石霜慈明の下に、黃龍惠南、楊岐方會の二系統を分

ち、法孫頗る榮えしかば、唐末五代の五家に黃龍、楊岐の二宗を加へて、世に五家七宗と名けられたり。

石霜慈明



黃龍宗

黃龍宗はその化甚だ盛にして、惠南の會下俊才多く、黃龍祖心は最も著る、祖心の法を嗣ぐものに悟新、惟清等あり、惟清より數傳して懷敞に至る。懷敞は榮西入宋の時の師にしてその法脉は我が日本に傳へられたり。

揚岐宗

揚岐宗は初めは黃龍宗の如くには盛ならざりしも、法演の下に圓悟(克勤)、惠勤、清遠等の俊傑を出してよりその唱導は一代を風靡したり。

圓悟の會下俊才甚だ多かりしが、宗杲、紹隆の二人はその首なるものにして、宗杲は曹洞禪を排して大に臨濟の禪風を揚げ、盛名當代を歴するの觀ありたり。然れども法系長く後世に存して、圓悟の法流を廣く布けるは、寧ろ紹隆の系統にして、殊に感傑門下の祖先、宗岳の法統は日本臨濟宗と最も深き關係を結びたり。

### 第五章 支那佛教漸衰時代……元、明、清

#### 第一節 元朝佛教と喇嘛教 (西紀一二七九—一三六七)

元の世宗

蒙古族北より起りて南宋を滅ぼし、都を燕京に奠めて、歐亞に跨

道教の衰頹

れる空前の大帝國を建設せり、これを元の世祖とす。

世祖は天下統一の後、至元十八年(一二八一)老子道德經以外の道藏經を偽經となして燒棄し、且つ道士をして歸僧或は還俗せしめてより、道教は甚だしく衰頹せり。道教と共に佛教も亦外に王者の保護なく、内に高僧出でずして、漸衰の傾向を現したりしが、獨り禪天台は、舊來の惰力によりて、漸くその命脉を維持せり。

曹洞宗の法流

禪宗は、元の世に至りても尙、曹洞臨濟の二宗のみは榮へしが、曹洞宗は北方に流布せり、如淨禪師より七代の法孫に萬松行秀あり、得法の後、萬松庵に住して萬松老人と稱せられ、晩年從容庵に退きて『從容錄』を著し、臨濟の『碧巖集』と並び稱せられたり。これより清朝に至るまで曹洞の法流は遠く流れたれども、後世に及ぼせる影響は大ならず。

臨濟宗の中興

臨濟宗は、無準禪師の後、雪巖、高峯、中峯等屈指の禪匠ありて南方

天台宗の名匠

に行はれたり、天目齊の法系に出てたる海雲印簡は、大に王侯庶民の歸仰を受けて臨濟楊岐の一宗を中興せり、海雲の弟子可菴朗の門に出でたる劉秉忠は、當時世祖に用ひられ帝業を助けて大功ありしかば、臨濟宗の弘教は大に便宜を得、爾後その宗勢は獨り盛なることを得たり。

禪宗の外、天台宗に在りては、石屋志磐は元の始めに『佛祖統記』を著して佛教の史實を究明し、玉崗蒙潤は『四教義集註』を著して、共にその名を著せり。

これより先、世祖(忽必烈)は、嘗て兄憲宗の命を奉じて西藏を伐ち喇嘛僧發思巴を伴ひ還りてより、喇嘛教は始めて蒙古滿州地方に行はれしが、世祖の即位するに及びて、發思巴を帝師とし喇嘛教を國教と定めてより、盛に行はれたり。

發思巴の功績

發思巴は帝師として世祖の帝業を助け、殊に蒙古文字を創制し

喇嘛教の傳來

て、西藏の經典を多く翻譯し、盛に喇嘛教の宣布に努めしかば、その名聲は天下に轟き、厚く朝野の歸仰を受けたり、晚年故國に歸り世祖の至元十七年(二二八〇)四十二才にして入寂せしかば、帝は舊徳を追懷して、大塔を京師に建て、舍利を藏せりといふ。

これより喇嘛教は元朝累代の尊信を受け、帝師は皆西藏より來りて政治と密接なる關係を結び、盛に流布せられしが、元末順帝の時伽璘眞來りて帝師となり、帝に勸むるに専ら淫樂を以てせしかば、その弊害甚だ多く、遂に元朝衰亡の一因をなせり。

蓋し喇嘛教は西藏の佛教なり、西藏佛教の起原は明ならずと雖も、西曆六世紀の頃、スロンツァンガボ王の治世には、東は唐と交通し西は印度と往來して、西藏の文化漸く開けたり、嘗て王は尼波羅を侵略し、王女ブリクチイを聚りて妃となし、更に唐の太宗と戰を交へ、その講和條件として王女文成公主を得て歸りしが、ブリクチ

元朝ミ喇嘛教

西藏佛教の起原

西藏文字の  
創造

喇嘛の起原



喇嘛の佛畫

イ及び文成公主は、豫てより佛教を信じ、各々自國の文明を輸入すると共に、王に勸むるに佛教を以てせしかば、王は始めて佛教を信じ、トムミサンボタ等十人を印度に遣し、佛教を學ばしめたり。留學凡そ七年にして多くの梵經を賚し、歸國の後には、梵字を本として新に西藏文字を製し、これによりて始めて梵經の翻譯をなしたり、これを西藏に佛教あるの始めとす。スロンツアンガボ王の歿後は、西藏の佛教振はざりしが、西紀七世紀の初めに當り、チスロン、デツアン王の時に至り、始めて佛教に

喇嘛教の支  
那傳來

紅衣派と黃  
衣派

關する制度を定めてこれを國教とし、印度の僧シヤンタ、ラクシユタ及びバドマ、サムバワ(蓮華生三藏)を迎へて首都サマーエに一寺を建立し盛に翻譯の業を興し、蓮華生をその長老となしたり、これを喇嘛教の開祖となす。蓋し喇嘛は元寺院の長老を呼ぶ尊稱なりしが、後には僧侶の通稱となり遂に宗教の名となれるなり。爾來喇嘛教は盛衰ありしが、十三世紀の頃に至り梵典の翻譯盛に行はれ、喇嘛教の基礎は漸く強固となりしが、十三世紀の後半、元の忽必然(世祖)の西藏侵入により始めて喇嘛教は藏外の支那に行はるゝに至りしものなり。その後十五世紀即ち明末に當りて、西藏佛教史上の一大偉人ツオンカバ(札克巴)出で、從來西藏に行はれたる中觀宗と密教との教義的融和を企つると共に、一方に於ては僧侶の墮落を改革して一派をなせり、これ即ち新教にしてこれを黃衣派といひ、これに對

黄衣の二派

して在來の舊教を紅衣派と稱するに至れり。斯て札克巴はガルタン大寺(甘丹寺)を建て、これに住し、喇嘛教政治の端を開きしが、十五世紀以後に至りては、黄衣派は紅衣派の勢力を壓倒して、遂に達賴、班禪の二大喇嘛となり、達賴喇嘛は拉薩に、班禪喇嘛は札什倫布に在りて、西藏の政教兩權を掌握し、以て今日に及べり。

### 第二節 明代の教勢 (西紀一三六八—一六六三)

明の太祖

元朝は外征の頻繁と喇嘛の貪婪とによりて、財政困難となり、終には權臣の專横によりて朝政頗る亂れしかば、久しく蒙古の羈絆に不快なりし漢人は、この機に乗じて四方に競ひ起れり。中にも朱元璋の勢日に強く、連に元軍を破りて順帝(代十二)を逐ひ、天下を一統して金陵に即位せり、これを明の太祖とす。

太祖の保護

太祖は元來禪僧の出なりしかば、佛教の保護には頗る熱心にして、屢々令を發し僧尼の生活を正し、又僧錄司及び道錄司を置きて天下の釋道二教を統監せしめ、以て佛教の興隆を圖りしかば、明代に於ける在來の佛教は喇嘛教と共に順調に發達を遂げたり。

武宗の奉佛

殊に武宗(代十二)の如きは奉佛の念厚く、自ら大慶法王西天覺道圓明自在大定慧佛と稱して、佛教を興隆せしが、この時一面には佛教に對する反感朝野に現はれ、佛徒の跋扈を憤慨して朝廷に迫れり。世宗(代十二)の世となるや、道士邵元節を真人の位に昇らしめて道教の興隆を圖りしかば、佛教は自ら排斥せられ、嘉靖十五年(一五三六)には禁中の佛殿を除き、又佛像佛具一萬三千餘を破壊せり、穆宗(代十三)は道教の弊害を知りて、隆慶六年(一五七二)道教を禁じてより佛教は復興せしが、僧徒の權力を弄する者出でて、漸衰するに至れり。

佛教の漸衰

明朝累代の帝王によりて佛教は保護を受けたれども隨唐時代

雲棲株宏

の盛觀には比すべくもあらず、僅かに禪宗に於ける雲棲株宏、天台に於ける藕益大師智旭ありて、支那佛教史上掉尾の偉觀をなせり。雲棲は名を株宏といひ三十歳にして出家し、諸方を行脚して心膽を練り、法を求むること多年なりしが、後に杭州の雲棲寺に住し禪と念佛の二宗を融合して盛にこれを弘通したり。著書甚だ多きが中に『竹窓隨筆』『禪關策進』等は有名なり。神宗<sup>(十四)</sup>の萬曆四十三年(一六一五)八十一歳にして入寂せり。

藕益智旭

藕益智旭は、はじめ儒教を好みて佛教を排斥せしが、十七歳の時雲棲の『竹窓隨筆』を讀みて悔悟し、遂に佛門に歸したり。爾來専ら華天禪律法相念佛等を學びたりしが、殊に天台に精通し、又深く淨土に歸して念佛を修したり、されど彼は一宗に拘泥することなく諸宗融合一致論を唱道して、當時の佛教を融和せんことに努め、永明王の永曆九年(一六五五)五十七歳にして入寂せり。著すところ諸

清の聖祖

宗に通じて甚だ多く『閱藏知津』は大藏經研究の指針として今猶學者の尊重するところなり。

### 第三節 清朝佛教の衰頹 (西紀一六六二)

明朝は久しく内憂外患に苦しみしが、神宗<sup>(十四)</sup>の時に至りて、北方の後金國興りて滿洲族を統一し、勢を得て國號を清と改め、漸次南侵せしかば、明は永明王に至りて滅亡し、清の聖祖は之に代りて支那本部を統一したり。

支那佛教の衰頹

聖祖及び高宗は、主として儒教の復興に意を用ひたれども、在來の佛教には何等の保護をも與ふるなく、内に高僧の出でざりし爲め、支那在來の佛教は益々衰頹するに至れり。

喇嘛教

然るに喇嘛教は元朝以來の政策を襲踏し、藩部統轄の手段として、特に喇嘛僧優遇の道を立て、滿洲蒙古等には盛に行はれたれど

支那佛教の概観

も、今日に至りては、僧俗ともにその意義を解するもの少なく、名山巨刹は徒に昔日の盛観を物語れども、寺僧は唯だ無爲徒食するのみにして、法光は將に消滅せんとするの危機に陥りたり。

上來述べたる支那佛教を概観するに、佛教の東漸以來、幾多の經論は翻譯せられて廣く傳播し、教理の研鑽と共に輸入佛教の域を脱して、支那佛教を大成し所謂隋唐の黄金時代となりしが、治亂興亡常なき支那の國家に在りては、佛教も亦其影響を蒙ること甚しく、遂に今日の如く支那佛教衰頹の悲運に會するに至れり。

大正十五年四月十日印刷  
大正十五年四月五日發行

印度支那佛教史要

定價 金壹圓貳拾錢

著者

平安專修學院

代表者

渡邊 隆 勝

發行者

清水 精 一郎

印刷者

須磨 勘 兵衛

印刷所

内外出版株式會社

不許複製



發行所

興教書院

京都市油小路御前通上ル

振替大阪一〇八一五東京四二一三



511  
139

終